ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2012 [Vol.1]

ごあいさつ

いまから60年前の昭和27年（1952）に全国美術館会議が発足した当時、日本各地で美術館設立の機運がたかまり、ようやくわが国でも文化立国にむけての確かな手応えを感じるようになった。公立私立の美術館館長たちは確かな上昇機運のなかにあることをよろこび、そのことの確認のために懇親会を中心とする全美を発足させたのである。この見通しはみごとに的を射て、その後、雨後の竹の子のように美術館が設立されていった。大学では学芸員資格の取得がもてはやされ、海外からの展覧会も数多く開催されるようになった。やがて未曾有の好景気とともに美術品市場も拡大し、欧米から高価な美術品が将来されるようになった。

しかし、美術館にとっての恵まれた時代は短期間で終焉を迎えることになる。バブル期以前からすでに指摘されていたことではあるが、美術館、博物館、公民館等地方自治体が競うようにして建設したいわゆる「箱物」行政に対する疑問と批判が浮上し、やがて「箱物」不要論にまで発展するようになった。多くの美術館にとってはとばっちりを受けた感もなくはないが、好景気の勢いに同調していたことも事実で、その間、地道な活動や内容の充実につとめていたかといえば、反省点がまったくなかったわけではない。

「箱物」不要論に対する理論的な反論を準備するまえにバブル崩壊をむかえ、「箱物」不要論のみが正鵠をえたかのように生き残ってしまった。もちろんその間にも金沢21世紀美術館や国立新美術館、森美術館や地中美術館が設立され新たな美術館活動の動きも出てきた。しかし、わが国全体を見渡すなら国と地方自治体の財政悪化のために美術館活動が予算の上で大きく制約されるようになり、最近10年間はそれ以前と比較するなら一定のダウンサイジングを余儀なくされている段階にまでいたっているといえよう。

そのような社会状況のなかでは、全美発足当時のようにただ座して環境の変化をまつだけでは何事も好転しないことが明白となってきた。したがって全美会長の前任者である蓑会長時代からの悲願である「美術品の国家補償制度」に関して、全美は組織をあげてその実現にとり組み、ようやく昨年6月に法律が施行されることになった。美術館にとって「冬の時代」だからこそ全美はその組織力を生かして美術館の基盤を充実させ活動をより活発にしていかなければならない。そのためには全美の企画委員会を中心としてわが国の美術館はどうあるべきかという将来構想を練り、その構想を広く社会に訴えると同時に実現への努力をすることが重要である。全美は「提案と主張」の組織に変わりつつあるのである。

全国美術館会議会長　青柳正規（国立西洋美術館）

ごあいさつ

このたび、長いあいだの懸案であった全国美術館会議の機関誌『ZENBI』の発刊を見るにいたったことは、何よりの慶事である。それは今後、会員館相互の連絡、交流、協力に役立つとともに、日本における美術館活動の軌跡を記録し、伝える重要な資料となるであろう。

改めて言うまでもなく、美術館は、われわれの祖先から伝えられた貴重な美術遺産や現代作家の創造活動の成果を、関連の資料も含めて調査、収集、保存、研究、公開することを基本的な使命とする。その対象範囲はきわめて広く、果たすべき役割もまた多岐にわたっている。会員各館は、それぞれの事情に応じて収蔵品の範囲や活動内容を独自に定めて事業を展開しているが、それと同時に、すべての美術館に共通する課題や事業も少なからずあるので、全国美術館会議では、そのような課題や事業に対応して美術館活動の振興を図るため、専門委員会を設けることができる旨を規約で規定している。企画委員会は、この規定に基づく専門委員会として設けられたもので、その目的は「規約第1章に定める目的及び事業の実現にむけて、事業活動を企画立案する」こと、またその組織としては、事業のテーマと内容に応じて「企画委員会には、事業企画に必要な研究を進めるための研究部会を置く」ことが、「企画委員会要綱」によって定められている。すなわち、企画委員会はいわば参謀本部にあたるものであり、研究部会は実質的な活動を担う実働部隊と言ってよいであろう。現在のところ、研究部会は七部会設置されており、企画委員会は各部会の部会長及び理事から選出された企画委員長によって構成されている。

現在の七つの研究部会は、以下の通りである。

- ○保存研究部会
- ○教育普及研究部会
- ○情報・資料研究部会
- ○小規模館研究部会
- ○ホームページ運営研究部会
- ○全国美術館会議ニュース研究部会
- ○美術館運営制度研究部会

これらの研究部会の充実した活動については、これまでにも総会の場での報告や、成果刊行物、ホームページ等を通じて公表して来たが、この機会に、各研究部会からの報告として、まとめてここに掲載する。会員館各位には、企画委員会および研究部会に対して、今後ともいっそうのご協力とご支援をお願いする次第である。

全国美術館会議企画委員長　高階秀爾（大原美術館）

CONTENTS

ごあいさつ　1

ごあいさつ　全国美術館会議会長　青柳正規 • 1
ごあいさつ　全国美術館会議企画委員長　高階秀爾 • 2

震災対応　3

全美事務局の初期活動と石巻レスキュー　村上博哉 • 3 | 気仙沼市における文化財レスキューの状況　川島秀一 • 6
全美　陸前高田市立博物館被災美術作品等救援活動について　浜田拓志 • 8

部会報告　12

保存研究部会　伊藤由美 • 12 | 教育普及研究部会　鬼本佳代子 • 13 | 情報・資料研究部会　鴨木年泰 • 14
小規模館研究部会　渡辺浩美 • 15 | ホームページ運営研究部会　宮武弘 • 16 | 全国美術館会議ニュース研究部会　尾﨑信一郎 • 17 | 美術館運営制度研究部会　河﨑晃一 • 18

ブロック報告　19

［北海道］街全体を舞台にした展覧会と作家の連携　吉崎元章 • 19 | ［東北］福島からの報告　荒木康子 • 21
［関東］美術館の存在意味を問われる―3・11 以後、2011 年春夏の美術館活動について　小勝禮子 • 23 | ［東京］善戦・苦戦・奮戦―2011 年度前半の展覧会を振りかえって　松本透 • 25 | ［北信越］常設展の魅力度アップ事業と近隣美術館との連携　杉野秀樹 • 27 | ［東海］国際展とその傍らで　天野一夫 • 29 | ［近畿］関西の美術（館）事情　菅谷富夫 • 31
［中国］広島から発信する、オノ・ヨーコの新作メッセージ　神谷幸江 • 33 | ［四国］芸術祭以後の四国・瀬戸内　中田耕市 • 35 | ［九州］面的な情報発信は可能か？―連携進む九州の美術館　山口洋三 • 37

新規会員館紹介　39

七戸町立鷹山宇一記念美術館 • 39 | 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館 • 40 | 中村研一記念　小金井市立はけの森美術館 • 41 | 佐久市川村吾蔵記念館 • 42 | 松本市美術館 • 43 | 清須市はるひ美術館 • 44

全国美術館会議事務局からの連絡　45

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定　46

編集後記　46

ZENBI フォーラム　F-01

01 歴史資料ネットワークについて 江上ゆか • F-01 | 02 あの時の水戸芸術館、いま、そしてこれから 高橋瑞木 • F-04 | 03 ケアの場としての美術館 稲庭 彩和子 • F-06 | 04 もっと野性を 池上司 • F-10 | 05 ヨコハマトリエンナーレ 2011 を巡って• F-13 | 投稿のお願い• F-16

ZENBI　全国美術館会議機関誌　Vol.1　2012 年 1 月 1 日発行　©全国美術館会議
［編集］全国美術館会議ニュース研究部会　編集幹事　尾﨑信一郎　松山利光
［発行者］全国美術館会議　〒110-0007　東京都台東区上野公園 7-7　国立西洋美術館内　TEL 03-3828-0290
［デザイン］宮谷一款（株式会社エヌ・シー・ピー）［印刷］日本写真印刷株式会社　〒604-8551　京都市中京区壬生花井 3

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故は全国の美術館に大きな影響を及ぼした。特に震災の直撃を受けた東北地方の美術館、博物館は施設や展示、収蔵作品、資料に甚大なダメージを被り、不幸にも犠牲となった職員もいる。全国美術館会議では震災直後より被害状況の把握に努めるとともに、文化財救援の組織づくりに関わり、4 月より石巻文化センターと陸前高田市立博物館の二つの施設のレスキュー事業を進めた。救援事業の全貌はいずれ報告書等にまとめられることとなろうが、ここでは二つのレスキュー事業に関わった全国美術館会議の担当者および気仙沼地域における文化財レスキューの中心となった美術館職員から寄せられた報告を記録として留める。

全美事務局の初期活動と石巻レスキュー

村上博哉（国立西洋美術館）

3 月 11 日からの全美事務局の動きと、4 月下旬に開始された石巻文化センターの救援活動については、いずれ詳細な報告をまとめる必要があると思っている。しかし、石巻の救援は、震災から 8 か月経った今も終わっていない。文化センターの 2 階展示室に残る彫刻作品の搬出を間近に控えながら、この原稿を書いているところである。断片的な覚え書きにとどまることをご容赦いただきたい。

地震の発生時、国立西洋美術館はレンブラント展の開会式の最中であった。その日の夜、事務職員が館に残る招待客の対応と施設の点検、学芸職員が内覧後に残されていた展示作業と、展示室・収蔵庫内の作品点検にあたる一方、全美事務局としては災害対応の要綱に沿って連絡本部を設置し、翌日から東日本の会員館へのメールと電話で被害状況の確認を始めた。メンバー同士で連絡を取り合っていた保存研究部会の協力も得て情報をまとめ、3 月 16 日に会員館の被害状況一覧をごく簡単な形で全美ホームページに載せ、18 日には第二報を出している。この時点で、北海道から関東・北信越までの会員館のうち、唯一状況を把握できず「情報収集中」と記したのが、石巻文化センターである。直接連絡を取る手段が閉ざされていたが、全美事務局の立場としては、もっと積極的に地元自治体等から情報を求めるべきだったかもしれない。しかし、壮絶な状況下にあるはずの県や市当局に問い合わせるのは、正直なところ気が引けたのである。震災数日後からやりとりをしていた文化庁美術学芸課の朝賀浩氏を通じて石巻文化センターの状況を知ったのは、3 月も末のことだった。宮城県教委から文化庁への報告によると、収蔵庫のある 1 階が津波の被害に遭っている。そして、残念なことに、職員の方 1 名が行方不明だという。

この情報と前後して文化庁が「文化財レスキュー事業」の立ち上げを発表し、全美もこれに参加することになったが、事業の実施主体となる救援委員会が発足したのは半月後の 4 月 15 日である。全美事務局も 3 月下旬から 4 月初めまで、東北・北関東の約 30 館に向けて、救援が必要かどうかの把握を目的としたアンケートを行ったほかは、ブロック連絡網の再構築、復興対策委員会の委員就任要請、そして有志と事務局による対策本部の設置という、救援・支援のための組織づくりに時間を費やしている。迅速な行動を求める声もあったが、事務局としては長丁場に耐える体制を整えることを優先し、救援活動は文化庁のレスキュー事業に歩調を合わせた方がよいと考えていた。国の事業としての位置づけがない限

り、余震の続く被災地への派遣を各館に要請するのは難しいという判断もあった。もっとも、この時期の事務局の動きには批判もあることと認識している。

石巻市のホームページに、市図書館におかれた文化センター仮事務所の電話番号が掲載されたのは4月7日であり、その日に初めて文化センターの方と直接連絡をとることができた。電話に出た佐々木淳主幹（当時）によると、建物の躯体に問題はないが、周辺一帯は津波の被害が甚だしく、電気も水道も通じていない。1階美術収蔵庫の扉が破れて内部が天井近くまで浸水した。民俗収蔵庫は壁が破壊され資料が流出している。水損した作品・資料の運び出しと処置に救援を求めたいが、館内に流れ込んで収蔵庫の周りをふさぐ大量の瓦礫の撤去と、動かなくなったシャッターの切断等の整備作業が先決だという。また、ちょうどこの日、文化庁の朝賀氏が現地調査に入っていた。全美が救援に加わることを佐々木氏に伝え、続いて石巻からの帰路にあった朝賀氏とメールで連絡を取り、ここから文化センター救援準備の相談が始まった。そして、10日に兵庫県立美術館で運営制度研究部会の拡大会合に続いて行われた対策本部ミーティングが、全美の救援活動に関する最初の実質的な話し合いの場となった。文化庁との連携に加え、15日に発足した救援委員会の事務局（東京文化財研究所）の岡田健氏とも連絡を取り、文化財レスキュー事業の最初の活動となる石巻文化センターの美術作品救援に全美が参加することが決まっていったのである。

救援委員会は発足後間もなく仙台市博物館に現地本部を設置し、4月20日から石巻文化センター内の瓦礫撤去を始めた。全美事務局は19日に会員館へ救援スタッフ募集の通知を出したが、美術作品の運び出しを27日から29日に実施すべく準備されたいとの指示を20日に文化庁から受け、石巻派遣の参加メンバーを急募することになり、会員館から筆者を含む6名と、賛助会員カトーレック3名による全美チームが慌しく編成された。

これ以後6月までの石巻レスキュー活動の経過については、全美ホームページに概要を報告済みである。筆者は4月25日に仙台の現地本部打合せに全美事務局として出席し、翌26日、石巻文化センター内の瓦礫・土砂撤去と作品搬出の準備作業に加わった。同日の夜には全美の派遣チームが松島の宿舎に集合し、27日から29日まで、宮城県・石巻市の教育委員会、文化庁、国立文化財機構のメンバーと、宮城県美術館及び県外からの全美チームによる共同作業が行われた。救出対象となった美術分野の所蔵品は、昭和前期に活動した石巻出身の木彫作家・高橋英吉（1911-1942）の作品・資料、高橋にちなんで収集された近代の木彫及び木を素材とする現代美術作品、そして地域の作家による絵画・素描等である。これら212件（素描一束を1件と数えた例もあり、作品点数では数百点におよぶ）を1階から運び出し、屋外で汚れを落として撮影・梱包を行い、ヤマトロジスティクスとカトーレックの美専車へ積込み、宮城県美術館へ移送した。絵具が剥落するおそれのあった油彩画10点ほどは、現場で表打ちが施された。文化センター周辺では、自衛隊による行方不明者の捜索が続けられていた。

石巻文化センターでの救援活動　2011年4月27日
撮影：寺口淳治氏（和歌山県立近代美術館）

次いで、宮城県美術館で救出作品の応急処置が行われている。文化センターには近くの製紙工場から大量の紙やパルプが流れ込み、館内に堆積したため、作品には泥と溶けたパルプ屑がこびり付き、一部にカビも発生していた。彫刻、絵画、素描をそれぞれに応じた方法で一点ずつ汚れを落とし、消毒・防カビ処置を施して乾燥させる作業は、移送翌日の4月30日から5月28日まで休みなく続けられ、交代で仙台に赴いた各地の会員館職員のほか、藤原徹先生をはじめ東北芸術工科大学の教員・学生、民間の修復家、東北大学美術史研究室のボランティアの方々にも協力をいただいた。石巻での搬出と仙台での応急処置作業に参加した会員館職員は、19館・40名におよぶ。

もっとも、この一連の活動は、必ずしもすべてが計画どおりに行われたわけではない。むしろ、多くの場面において見通しが不十分なまま行動が始められ、現場にいる人々の積極的な発案と柔軟な判断によって、そのつど目の前の問題に解決が与えられてきたのである。第一に、石巻の作品をどこへ収容するかは、文化庁との相談を始めた時からの懸案であった。水損してカビのおそれもある作品を、そのままどこかの美術館の収蔵庫や修復室へ入れることはできない。一時保管と応急処置には、最低限のセキュリティと安定した空気環境があり、なおかつ汚れても差し支えない作業所的な空間を確保する必要がある。しかし、広い空きスペースがあれば避難所等に使われているため、被災地でそういう場所を探すのは容易ではない。実は、全美チームの顔ぶれが決まった救出作業5日前にも、移送先の見通しは立っていなかった。最終的には、作業2日前の現地本部打合せで、宮城県美術館の有川幾夫副館長と三上満良氏が作品の受け入れに応じてくださったことで解決したのである。しかも、作業の段階ごとに別々のスペースが必要になることを見越して、最初の収容は屋外倉庫、応急処置は屋外のガレージ、処置後の乾燥・保管はギャラリー準備室と、それぞれの段階に応じたスペースを館内の各所に用意していただいた。もちろん、宮城県美術館の貢献は場所の提供にとどまらない。石巻の瓦礫撤去から作品救出までの作業には、同館の学芸・普及スタッフが毎日交代で参加し、作品移送に続く応急処置とその後の保管にも館をあげて協力していただいた。宮城県美術館と岩手県立美術館がそれぞれ石巻と陸前高田のレスキューにおいて、地域の中核館として果たした役割は非常に大きい。

また、当初の予定では、救出資料を4月28日、29日に運び出した後、連休明けに応急処置を始めることにしていた—というよりも、移送先が直前まで決まらない中で、応急処置の段取りまで手が回っていなかったのが実情なのだが。しかし、28日の第一便搬入後に宮城県美術館で行われた救援関係者打合せで、すぐ応急処置に着手すべきだと主張したのは、兵庫県立美術館から全美チームに参加した故・田中千秋氏である。水損した作品は予想以上に危ない状態にあり、放置すれば絵具の剥落とカビが進行して取り返しがつかなくなる。「作品を救いたい」と田中さんが強く語ったことを、あの夜同席した誰もが忘れられないだろう。そして、全美メンバーのうち田中さんと愛知県美術館の大島徹也さんが、石巻での作業に続いて仙台に数日間残ってくれることになり、29日の夕方に第二便の移送が終わると、翌日の朝からただちに田中・大島の絵画チームと山形から駆けつけた藤原先生の彫刻チームによる応急処置作業が開始された。16年前の阪神・淡路大震災に続き、今回も田中さんはレスキューの現場で先頭に立っていた。その田中さんが9月に急逝されたことは本当に悲しい。震災で亡くなられた方々とともに、田中さんのご冥福を祈る。

仙台で応急処置を終えた作品は、乾燥期間を経て、6月から順次再移送が行われた。現在は宮城県美術館、東北芸術工科大学、東京藝術大学、国立西洋美術館に分割して保管され、修復のための作業が進められている。いま西洋美術館には、キュクラデス彫刻から晩年のピカソまでの所蔵品と、展覧会のためプラド美術館から借用したゴヤの《着衣のマハ》等とともに、日本の石巻という町で描かれ同地で津波に遭った絵画や素描が収容されているのである。しかし考えてみれば、美術史上の名作と呼

ばれるものの大半が、かつて破壊の危機にさらされ「レスキュー事業」の対象となった経験を持っている。第二次世界大戦の開戦前後、ヨーロッパの主要都市の美術館はすべて戦火を避けてコレクションの大移動を行い、ルーヴルの作品はシャンボールの城へ、ロンドンのナショナル・ギャラリーの絵画はウェールズの採石坑へ、プラドの絵画は中立国スイスへ移された。西洋美術館の原点である松方コレクションの絵画も、パリのロダン美術館から郊外のアボンダンという寒村へ避難している。美術作品が時代を超えて受け継がれるものであるならば、数百年、千年という長い時間のあいだに、天災あるいは人災による危機に一度ならず遭遇することは宿命でもあるだろう。そのような危機に際して日本の美術館が共同で対応にあたるという共通認識が作られたのは、16 年前の阪神・淡路大震災においてであり、今回のレスキュー活動でも阪神・淡路の経験が確かに生かされた。しかし、運び出した作品を修復して石巻へ戻すには、まだ相当な時間が必要である。美術作品を守るという美術館学芸員の最も基本的な仕事に、日本の学芸員たちがどのように取り組むのか、これからの行動においてそのことが問われているのだろう。

救出作品の応急処置を行う故・田中千秋氏
宮城県美術館にて 2011 年 5 月 3 日

気仙沼市における文化財レスキューの状況

川島秀一（リアス・アーク美術館）

宮城県気仙沼市小々汐の尾形家は文政 7 年（1824）に建てられ、現存してきた古民家であったが、国立歴史民俗博物館の民俗展示を平成 25 年にリニューアルすることに伴い、その居間等の一部が再現される予定であった。ところが、3 月 11 日の大震災による大津波によって尾形家は流され、以前に建っていた場所から移動して、茅葺屋根だけを残したままの姿になった。過去の何度かの三陸津波に耐えてきたはずであったが、今回はその 200 年近い歴史を閉じることになった。

国立歴史民俗博物館では、館内での討議の結果、現存できなくなったからこそ残す意義があることを理由に、予定どおり尾形家の居間を再現することに決めた。そして、できることならば残されている部材をそのまま展示に活用することはできないだろうかということから、現地に赴き、瓦礫の中から可能なかぎり部材を集めることになった。

尾形家の当主の婦人は、先代から「地震が来たら雨戸を閉めてから高台へ逃げろ」ということを伝えられてきた。今回の地震時にも雨戸を閉めて逃げたので、家財道具は外へ流されず、大きな屋根が家を抱え込むように潰れたものと推測し、屋根の中に入って家財道具を取り出す作業を連休明けから始めた。その結果、当初予想していた以上の家財道具や信仰関係の神仏やお札が発見された。

この尾形家は近世から昭和初期まで、イワシ網の網元であり、気仙沼地方においても歴史的な価値のある家財道具や漁具が眠っていた。それらを救出し、リアス・アーク美術館に一時保管することになった（当館の副館長である筆者は同時に国立歴史民俗博物館リニューアル委員であり、その個人的な関わりがより早くレスキュー作業の行動を開始することができた大きな理由である）。

これらの作業が始まってから一カ月後には、尾形家の屋根が解体されることになり、屋根を失ってからは、その下にあった紙資料類はすぐにもカビが付き始め、茅葺屋根自体が中の物を守っていたことが判明した。

一方で尾形家には近世文書が 900 点ほどあった。戦後間もなく、日本常民文化研究所が借用し、そのままになっていたが、平成 6 年（1994）に神奈川大学（日本常民文化研究所）の網野善彦氏等の尽力により返却された。尾形家の石蔵に保存されていた古文書は、今回の津波で蔵もろともに散逸し、かろうじて 200 点余りを瓦礫の中から探し出した。

神奈川大学からの返却時に、茶封筒に入れて整理されたまま返却されたこともあって、古文書の現物は直接に泥や船の油にまみれることもなく、水洗いを重ねながら、ていねいに扱えば、封筒から分離させて救出することが可能であった。実際のレスキューには国立歴史民俗博物館の研究員だけでなく、この尾形家文書の返却に関わった神奈川大学の研究者が指導に当たった。最終的には救援委員会を通して奈良文化財研究所に冷凍乾燥を依頼することになった（筆者は網野善彦氏による返却時に仲介役を担ったが、この古文書レスキューの迅速さも、個人的な繋がりが大きかった）。

その後、尾形家に関しては、「尾形家再建プロジェクト」が、一昨年に尾形家の屋根を葺き替えた熊谷産業の社長等の有志により結成され、国立歴史民俗博物館では、気仙沼の小々汐を中心に、有形の民俗文化を中心にレスキューを続け、現在も 2 名の研究員が毎週 3 日ほど現地や美術館に通っている。

被災した気仙沼市小々汐の尾形家

一方で神奈川大学の日本常民文化研究所は、被災した大島漁協の文書の救済を行ない、かつて近世文書の借用と返却にも大きな関わりのあった大島を中心に、古文書資料等のレスキューに数カ月当たることになった。

救援委員会等の文化財レスキューは、この後に、これらのレスキュー作業を追認するかたちで、巡検と書類のやりとりのため来市している。

ただし、気仙沼市の教育委員会では災害緊急雇用の臨時職員の 5 名を、このレスキュー作業に関わらせていただいた。さらに、大学間連携ボランティア活動のセンターの役割をしている東北学院大学から、8 月から 9 月までの夏休み期間中、毎週 4 日ずつ、全国の私立大学から、3 ～ 4 人の学生をレスキュー作業のボランティアに派遣していただいた。

このことにより作業の効率が上がったことは無論だが、国立歴史民俗博物館の研究員、市教育委員会の臨時職員、学生が同じ仕事場に集うことによって生じた人間的な関係は、それぞれの立場の者にとっても有意義であったと思われる。

なお、文化財のレスキューに関しては、尾形家や大島の漁協文書だけでなく、岩井崎プロムナードセンターや、エースポート等の小さな観光施設に展示されていた民俗資料も集めている。

現在は、リアス・アーク美術館の補修工事に入ることから、収集場所とレスキュー作業を月館小学校の旧校舎へ移して行なうことを検討中で、近日中に移動する予定である。また、津波による塩水をかぶった被災資料を、洗浄はしたものの、今後どのように保存していくかが、大きな課題となっている。

尾形家の屋根の下からオシラサマ (神様) を救出する

全美 陸前高田市立博物館被災美術作品等救援活動について

浜田拓志（和歌山県立近代美術館）

震災から支援要請まで（3月11日〜5月2日）

三陸海岸の沿岸部に位置する陸前高田市立博物館（岩手県）は、3月11日の津波により、甚大な被害を受けた。周辺の状況から、津波は2階建ての博物館を越える高さであったと推定され、6名の職員も全員が犠牲となっている。被災後、市立博物館関係者、市教委、岩手県立博物館、自衛隊等の手によって瓦礫等の撤去作業が実施されたのち、同館の歴史、生物、考古、民俗等の資料は岩手県立博物館を中心とする関係者の手によって順次関係機関に移送された。しかしながら500号、300号の大型作品も含む洋画作品約50点、書作品約70点については、支援先・移送先が決まらなかったため、市教委としては同館に残さざるを得なかった。※1

そこで、岩手県教育委員会から文化庁次長宛に5月2日付の文書で支援要請が出され、「文化財レスキュー事業」の一環としての救援活動が開始された。12日には文化庁美術学芸課の朝賀氏を始めとする一行が、陸前高田市関係者や岩手県教育委員会、岩手県立美術館・県立博物館職員とともに同館の被災状況を調査。岩手県美からは千田正和副館長、学芸員の根本亮子氏と三田聡子氏が参加している。

全国美術館会議の参加と救援活動の体制

全国美術館会議（以下「全美」）は、東北地方太平洋地震被災文化財等救援委員会（事務局：東京文化財研究所内。以下「救援委員会」）からの要請を受け、独立行政法人国立美術館（以下「国立美術館」）とともに救援活動に参加することを決定。※2 全美東日本大震災対策本部委員の中から、神奈川県立近代美術館の伊藤由美氏、ブリヂストン美術館の貝塚健氏、そして筆者の3名が本件のチーフとなり、各種の協議、関係者との連絡調整を担当することになった。国立美術館については東京国立近代美術館の松本透氏がチーフを務めた。このメンバーが救援委員会事務局の本件チーフである山梨絵美子氏（東京文化財研究所）、岩手県教育委員会、陸前高田市教育委員会、岩手県美大野正勝氏、根本氏と協議を重ね、連絡を取り合いながら事業を進めていく、というかたちがとられた。

受け入れ施設の選定と整備（6月13日〜7月13日）

被災した作品は、乾燥、燻蒸、応急処置、そして一時保管を行うため、適切な場所に移送しなければならなかった。作品群の体積が大きく、大量のカビも発生していたため、受け入れ施設の選定は難航したが、陸前高田現地調査（6月13日）の翌日に行われた会合及び実地調査で、ようやく盛岡市内の施設（以下「盛岡ラボ」）が選ばれた。長年使用されていなかった建物である。交通の便は良く、広々とした作業スペースや保管スペース、洗浄室は確保されていたものの、水道の配管工事を行い、電気を引き、大がかりな清掃を行う必要があった。燻蒸に備え、搬入作品を集積する木製のラックも製作された。このような整備は7月13日まで続けられた。

陸前高田市立博物館からの搬出作業と盛岡ラボへの搬入（7月11日〜14日）

陸前高田市立博物館における搬出作業は、前日の準備作業のあと7月12日から14日にかけておこなわれた。全美会員館（岩手県立美術館、国立美術館含む）11館から13名、その他12名が参加した。一番近い拠点であるJR一関駅付近から同館まで車で1時間半かかる。スタッフはワゴン車2台に分乗して朝夕往復した。

連日、気温30度、湿度70パーセントを超える蒸し暑い天候だったが、作品に大量発生していたカビによる健康被害を回避するためには、軽装で作業というわけにはいかない。ヘルメットとマスク以外に、ゴーグル、防護服、ニトリル手袋を着用する必要があった。この装備で500号、300号の大型作品を含む156件の作品を二階から一階に階段で降ろし、記録撮影し、梱包・運搬するわけで、熱中症や過労を防ぎ、事故を防止できるよう種々の対策を講じながら作業が進められた。現地では電気も水道も復旧していない。ヘッドランプをはじめとする装備は必須であった。作品は14日に10トン車1台とレンタカーの2トン車1台を用いて盛岡ラボまで移送され、搬入作業は予定通り日没前に終了した。

［搬出・移送作業スタッフの構成］

全美、カトーレック株式会社（全美賛助会員）、陸前高田市教育委員会、岩手県教育委員会、救援委員会事務局

燻蒸と盛岡ラボの設営（7月15日〜8月20日）

燻蒸の準備（7月15日〜8月8日）を経て、8月9日から8月16日にかけて燻蒸が実施され、その後20日まで、ラボにおける各種の設営が行われた。※3 照明器具やカーテン、網戸が取り付けられ、岩手県立美術館から作業テーブルやイス等多くの機材が搬入された。諸般の事情で、契約電流は30アンペア。クーラーの設置は断念せざるをえない。室内に舞うカビ菌の軽減を図り、換気を行うため、排気用プラントも設計・設置したが、契約電流の関係で必ずしも十分な換気量を見込めなかった。電話回線がなかったため、外部との通信は携帯電話と全美のパソコン（無線インターネット接続サービス）で行うこととなった。施設のセキュリティーは弱かったので施設名称や場所は非公開とした。

応急処置及び作業（8月21日〜9月30日）

このように、広いスペース等作業に好都合な条件を有していた反面、制約も多かった盛岡ラボのなかで、8月21日から全美の派遣職員は、保存修復の専門家、救援委員会事務局職員等と共に、作品の応急処置・作業に従事した。

応急処置及び作業は、(1) 処置前の撮影および状態記録、(2) 額等の取り外し、(3) カビ、汚れの除去、(4) 処置後の撮影、処置内容記録、(5) 簡易梱包にて仮置き、という内容であった。「保存修復の専門家」とは、全美会員館の修復技術者及び、今回の救援事業の趣旨に賛同して参加してくださった大学及び民間の修復家である。彼らは被災作品の損傷に対し必要な処置を判断し、「サポートスタッフ」に作業及び注意事項の指示を行った。専門技術のいる作業は専門技術者が処置を行った。「記録スタッフ」は作業記録と資材補充、連絡事務等に従事した。

応急処置は約一か月後の9月25日に終了した。9月17日、岩手県立美術館に油彩画20点を、9月29日には残りの油彩画及び書を搬入。156件の保管に係る作業及び盛岡ラボの撤収は9月30日に完了した。8月21日からこの日まで、全美会員館（岩手県立美術館、国立美術館含む）29館から約50名、その他約35名が参加した。

［応急処置・作業スタッフの構成］

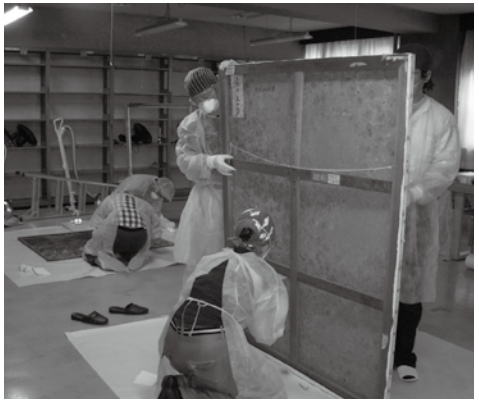
全美、保存修復の専門家・補助作業者、救援委員会事務局

陸前高田市立博物館での救援活動
2011年7月13日
撮影：田中淳氏（東京文化財研究所）

現場を支えた後方支援

文化財レスキュー活動は、陸前高田市立博物館と盛岡ラボだけで営まれたわけではない。多方面からの後方支援がこの二つの現場を支えた。

救援委員会事務局や全美事務局による各種のサポート。岩手県内の復興事業に奔走し、多忙を極めていた陸前高田市教育委員会や岩手県教育委員会、そして同県の中核館である岩手県立美術館の職員の方々。とりわけ原田光館長をはじめとする岩手県立美術館側のご厚意で、すべての作品が同館一次保管庫・収蔵庫に保管されることになったことは救援事業に大きな進展を与えた。同館の職員たちは現場に何回も足を運んで共同作業しただけでなく、救援活動に不可欠な地元情報を頻繁に提供してくれた。盛岡ラボに次々と到着する救援スタッフに必要な情報を届けるため、メーリングリストが整備され、岩手ファイルと名付けられたクラウド上の共有ファイルが作成されたが、その編集・通信作業に従事した全美会員館のメンバーたち、そして全美の呼びかけに応じて寄付をしてくださった実に多くの方々のことも記しておかねばならない。そして最後に全美対策本部の故・田中千秋氏（兵庫県立美術館）。彼は、陸前高田市立博物館の被災状況を憂慮するとともに、文化財レスキュースタッフにとってどのような装備が相応しいか情報収集に努め、また盛岡ラボの排気用プラント案についてもいくつか改善案を出して、現場スタッフの健康を気遣った。



盛岡ラボでの応急処置作業　2011 年 8 月 30 日
撮影：大野正勝氏（岩手県立美術館）

救援活動を後押ししたもの

今回の救援活動に関わったスタッフの数は約 140 名、延べ約 700 名である。※4 後方支援活動を含めると、参加者の数はもちろんそれをはるかに上回る。全国各地から志願して参集したスタッフと後方支援メンバーのひたむきな活動を後押ししたのは、共同して文化財を守ろうとする意識であり、また東日本大震災で被災した方々や亡くなった方々が、地域のコレクションや施設に寄せていた想いを少しでも取り戻せるように、という志なのだと思う。そのような意識や志のもとで、息の長い全美の救援活動が今後も続けられていくに違いない。

最後に、この報告を結ぶにあたり、今回の震災で被災された方々に謹んでお見舞いを申し上げるとともに、亡くなられた方々、そして田中千秋さんのご冥福を心よりお祈りしたい。

※1　陸前高田市には猪熊弦一郎に師事した画家・行木正義のアトリエがあり、新制作協会会員の交遊があった。同館の元館長・本多文人氏によれば、陸前高田市には昭和 50 年代より、美術館を核にアトリエ村をつくろうという「カルチャービレッジ構想」があり、市は基金を設けて作品を集めてきた。地元ゆかりの画家や、この地を描いた作品を中心に、長年収集を続け同博物館で保管してきたものがこの洋画コレクションである。

※2　独立行政法人国立美術館各館も全美に属している。

※3　搬入から燻蒸開始までかなりの時間を要したのは、「海水で濡れた資料を殺菌燻蒸することによる発がん性物質発生のリスクについて」、東京文化財研究所が 7 月 15 日から調査を開始したからである。詳細な調査の後、「被災絵画作品の燻蒸に際しては、作品が十分に乾いている状態で燻蒸を実施すれば、殺菌燻蒸の実施には大きな問題はない」という報告が出た。

※4　全美ホームページでは、岩手県内の他の 3 件の文化財レスキュー活動についての報告も掲載している。全美関係の参加者名簿とあわせてご覧いただきたい。

http://www.zenbi.jp/earthquake/tohoku/
http://www.zenbi.jp/topics/11/pdf/111123.pdf

保存研究部会

伊藤由美（神奈川県立近代美術館）

保存研究部会では、1993 年の発足以来、各館の保存担当あるいは保存に関心のある学芸員たちが集まり、作品保存、展示等に関わるさまざまな課題と向き合い、検討してきた。現在では年度毎 2 回の定期会合開催が定着し、部会員の所属美術館を順番に会場として行ってきた会合は昨年度までに 39 回を数える。会場となる館では展示室やバックヤードを見学し、問題点を共有して検討し合っている。また保存修復の専門家や資材、機材のメーカーからのレクチャーの機会もプログラムに組みこんでいる。発足以降、「むし・かび対策ノート」の作成や、ファシリティ・レポートを使用しやすい形に検討し直し、部会での検討内容を会員館が共有できるような形にしてきたものもある。その中でも、1995 年の阪神・淡路大震災の際に、会員館有志とともに阪神地域の美術館、博物館の被災状況を調査しまとめた報告書は、それを契機に全国美術館会議の規約「大災害時における対策等に関する要項」及び「実施要綱」が成立する基となった。それから約 15 年を経て、情報の伝達方法の変化や会員館の拡大等、さまざまな状況の変化にともなって内容の見直しが昨年ころから提案され、今年 2 月の青森県立美術館での定期会合では、見直しに関する体制作りが議題に上ったその矢先に、3 月 11 日の東日本大震災が起きた。

震災当日以降、東北及び関東を中心とした美術館より、自館や周辺地域の美術館の被災情況に関する情報が、部会員及び全美事務局宛メールにより逐次、情報がもたらされ、即時に情報を共有することができた。それらの情報を保存部会としてまとめ、全美事務局に提供することが、昨年度から引き継いだ、今年度の最初の活動となった。

その後、文化財レスキュー事業への協力要請を全美が受けたのを機に、保存研究部会としては、レスキュー資材リストの提供、保存修復スタッフの構成やレスキュー事業での具体的な処置方法の検討、被災作品の処置方法に関する外部からの問い合わせへの情報提供等を行ってきた。

今年度の活動としては、今後も震災に関わることが中心となるが、定期会合においては昨年度来取り組んできた、作品のコンディション・レポート作成に関する検討も続けていく。会合日程及び主な内容は下記のとおりである。

2011 年 11 月 18 日、19 日
栃木県立美術館

- 栃木県立美術館のバックヤード、展示室視察
- 「彫刻の修復と保存・展示について」（東北芸術工科大学　藤原徹氏）
- 東北地方太平洋沖地震の被災支援に関しての活動報告
- 東北地方太平洋沖地震の被災状況報告と防災について
- 「大災害時における対策等に関する要綱」等改定案の検討
- コンディション・レポート作成についての検討

2012 年 2 月頃
山梨県立美術館・山梨県立博物館

- 山梨県立美術館・山梨県立博物館バックヤード、展示室視察
- 東北地方太平洋沖地震被災地の学芸員による災害時の状況とその後
  ー被災の立場から生の声と本音ー
- 防災に関する全体討議
- 大地震時の博物館資料被災状況と文化財救済支援について
- コンディション・レポート作成についての検討

教育普及研究部会

鬼本佳代子（大原美術館）

本年度最初の教育普及研究部会の活動は、「東日本大震災救援・支援活動募金」の準備であった。この募金は、現在、文化財レスキュー等に利用されていることは会員の皆さんの知るところであろう。そもそもこの募金は、4月10日の美術館運営制度研究部会「東日本大震災支援会議」にて、当部会員の清家三智氏からの「美術館救援に特化した募金活動ができないか」という提案がきっかけとなったものであり、さらにその元のアイデアは、名古屋市美術館のボランティアから出てきたものである。この会議を経て後、同研究部会の有志と事務局と協力して準備を行い、5月の総会にて実施の運びとなった。

さて、教育普及担当者にとっては忙しい夏を経て、9月1日、2日に、本年度最初の会合を開催した。開催場所は宮城県美術館。会合の内容については、震災前より予定されていたことではあるが、奇しくも震災後初の会合が仙台という結果となった。既に良く知られているように、宮城県美術館は、1981年の開館当初より教育普及に力を入れており、この分野では常に先進的な活動を行っている。実は、同館の活動については、会合で既に何度か紹介・見学している。しかし、今回の目的は、同館で長年教育普及活動を実施し、美術館教育普及の草創期を担う一人である齋正弘氏の活動を、特に若手や近年当部会に入会した学芸員に見てもらい、その根本的な理念に触れてもらうことであった。1日目は、齋氏の「美術探検」と「美術館探検」に参加し、翌日は質疑応答という内容であったが、さまざまな質問が出、参加者たちの関心の高さが窺えた。一方で、教育的な理念に下支えされた齋氏の活動について、むしろ技術的な面での質問に多くの時間が割かれたことは少し残念でもあった。より、理念的なところに踏み込んだ議論ができれば、若手学芸員へのさらによい刺激になったのではと考える。

今年度後半の活動は、まず、全国美術館会議の学芸員研修の企画・実施をする予定である。本来なら、今年の3月14日に当研究部会企画の学芸員研修を実施のはずだったが、ご存じの通り、震災によって中止となった。この研修を、内容・講師ともに予定と変わらず、日程を今年の12月6日に変えて行う。テーマは博物館教育のいわば根本にある「社会教育」であり、社会教育の歴史や理念、そして、実践事例を、講座形式で5人の講師に語ってもらう予定である。そして、この研修を受け、社会教育活動が盛んと言われる松本市にて2回目の会合を開催する予定である。

また、現在、教育普及研究部会では、美術館教育普及の草創期の記録をどう残していくか、特に担当者たちがその活動の拠り所とした理念をどう残し、次の世代にどう継承していくかが大きな課題となっている。2008年より、それらを担当者へのインタビューという形で記録化しているが、これも機会を見つけて実施していきたいと考えている。

第38回教育普及研究部会会合の様子（2011年9月）

情報・資料研究部会

鴨木年泰（東京富士美術館）

情報・資料研究部会は、美術館における情報・資料の活用について、2009年度から毎年セミナーを開催してきた。2009年度の第1回は、2日間6講座によるセミナーを東京国立博物館・国立西洋美術館にて開催、2010年度の第2回セミナーは愛知芸術文化センターにて開催し、受講者より好評をいただくことができた。本年度は関東・中部と実施してきた会場を関西の地に移し、連続セミナー企画の掉尾を飾る第3回セミナーを12月16日、17日に奈良国立博物館にて開催する。

第1回セミナーは初めての試みでもあり、受講者21名と講師の双方にとって濃密な2日間となった。第2回セミナーでは前回受講者から寄せられた意見をふまえて内容を工夫し、また名古屋での開催となったことで、中部、関西エリアからの参加者も目立ち、この分野での情報共有が全国で求められていることを改めて感じた次第である。

そもそも本企画の原点は、展覧会場という限られた場所以外での入手が難しく、図書館での取り扱いの難しさから「灰色文献」とも呼ばれる展覧会カタログにあった。なかでも注目したのは、内容面よりも、表紙・背表紙や表題紙、奥付に、タイトルや著者、発行に関する情報をどのように記述するかといったことである。

一例を挙げると、ISBN（国際標準図書番号）という、図書に対して与えられる世界共通の番号を奥付に掲載することで、図書館では取り扱いが容易になり収蔵しやすい資料となる。美術館は、より多くの人に読んでもらいたいと思って展覧会カタログを作るが、会場で飛ぶように売れるだけでは限界があって、美術品が美術館に所蔵されて多くの人の目に触れるように、展覧会カタログも図書館にあってこそ、将来にわたるアクセスが保証されると考える。その意味で図書館側からすると、奥付は、実は非常に重要な部分になる。当部会は、美術館の現場では軽視されがちなこうした書誌情報にまつわる問題が、実は展覧会カタログの公共性や社会性を考えることにも直結するのではないかという思いでこれまで企画に取り組んできた。

本セミナーでは、変化のスピードが激しいライブラリーの現況を踏まえた上で、展覧会カタログ、美術館の逐次刊行物から始めて、近年Web上で構築・活用が進んでいる電子的リソースについても視野を広げ、書籍からデジタル情報までさまざまな美術情報・資料の効果的な整理・利用法を検討する。当研究部会が以前より取り組んできたテーマである作品情報へのアクセスと発信についても最近の動向を紹介し、美術館の現場で広く関心を呼び起こしていきたいと考えている。

今回の会場である奈良国立博物館仏教美術資料研究センターは本年8月にリニューアルオープンしたばかりで、例年の6講座に加え、同館の文化財アーカイブズ形成の先端事例について招待講座を設けた。これらを通じて、情報という地平から美術館が社会とどう関わっていくかを考えるきっかけを提供して参りたい。

セミナー講義風景（2010年9月、総論／講師水谷長志氏）

セミナー会場風景（2010年9月、愛知芸術文化センター）

小規模館研究部会

渡辺浩美（高梁市成羽美術館）

「小規模館研究部会」は、建物や予算の規模、あるいは収蔵品やスタッフ数等において、比較的規模の小さな美術館・博物館が集まり、交流を深め、諸問題を積極的に改善する知恵と技術を共有しようというネットワーク作りを目指す研究部会である。現在、小規模ながらも独自色を打ち出し、地域に根ざした活動を展開している北海道から鹿児島までの48館が、この研究部会に加盟している。

2011年度は、東日本大震災を受けて小規模館研究部会として再確認しなければならない事や新たな課題を研究討議する場を設けたいと考えている。12月15日、16日の2日間にわたって開催予定の第34回小規模館研究部会会合では、「小規模館における自然災害の認識と今後の取組みについて」をテーマに掲げ、第一部「宮城県気仙沼　リアス・アーク美術館からの報告」、第二部「文化財保存・修復―レスキューの現状と課題」(ディスカッション)を開催。文化財レスキューの参加者や修復家等それぞれの現場で活動している方々から具体的な事例報告をいただき、美術館防災の基本的な考え方、災後の対応等を参加者皆で探求する場としたい。

また今年度7月からマリー・ローランサン美術館を皮切りに、当部会加盟館5館による小規模館研究部会第2回共同企画展『マリー・ローランサンとその時代展―巴里に魅せられた画家たち』を開催している。本展覧会では、ローランサンが現在広く親しまれている夢想的な作風に転じた、第一次世界大戦後の1910年代から30年代、及びその時代を導いた20世紀初頭のパリの動向にスポットをあて、パリによって生まれた画家ローランサンらとパリによって成長した日本人画家たちが交錯した時代と場所の空気を、小規模館研究部会加盟館ならびに協力館の所蔵作品を展覧することでご紹介している。

出品作家

マリー・ローランサン、ジョルジュ・ルオー、
モーリス・ユトリロ、キース・ヴァン・ドンゲン、
レオナール・フジタ、児島虎次郎、佐伯祐三、
小磯良平、三岸節子ほか

開催館

マリー・ローランサン美術館
2011年7月29日～9月30日
高梁市成羽美術館
2011年10月22日～12月25日
一宮市三岸節子記念美術館
2012年1月28日～3月11日
神戸市立小磯記念美術館
2012年4月14日～7月8日
ニューオータニ美術館
2012年7月14日～9月30日

マリー・ローランサン美術館会場

ホームページ運営研究部会

宮武弘（福島県立美術館）

ホームページ運営研究部会は2004年10月の第1回会合以来、酒井哲朗部会長のもとで活動してきた（現在の部会員は7名）。設立当初の名称は「ホームページ開設・運営研究部会」で、文字通り「全国美術館会議ホームページ」の開設を目指していた。一口に全国美術館会議ホームページの立ち上げと言っても、その位置付けや具体的なコンテンツ、開設後の管理運営体制のあり方に至るまで検討課題が山積しており、2006年4月のホームページ公開まで、多くの関係者から協力を仰ぐこととなった。

まず過去の刊行資料を電子データ化し公開することはホームページの大きな柱となるものであったが、膨大な作業量が予想され一時は実現が危ぶまれた。しかし幸いにも、全美ホームページ開設が文化庁の芸術拠点形成事業として支援を受けることとなり、50冊以上にのぼる貴重な資料のPDF化、HTML化を果たすことが出来た。

さらに、全美の活動の前線を担う各研究部会から意見を集約するため、全部会の幹事に参加を求めて編集会議を開催。会議をきっかけに教育普及研究部会による「人々と美術館」というコンテンツが新たに加わった。これは、会員館における教育普及事業の事例を画像付きで紹介するもので、ホームページ開設初期の人気コンテンツとなった。その後も保存研究部会がまとめた『日本版ファシリティ・レポート』『むし・かび対策ノート』をウェブ公開するなど、各研究部会の活動成果を続々と掲載している。

全美ホームページにおいては、これらアーカイブの公開、研究部会の活動報告に代表される、会員館にとって有用なコンテンツを掲載するばかりでなく、2005年11月の「『効率性追求による文化芸術の衰退を危惧する』について」をはじめ、美術館のあり方をめぐる情報を〈トピックス〉で紹介することで、広く美術館の存在意義や使命をアピールすることをも目指している。

このようにホームページ運営研究部会は、全美ホームページの管理運営を通じて全美事務局や各研究部会のバックアップを行うという性格が強く、当部会と事務局、さらにはHP制作を手がけるパークウェーブ社を含めた三者が緊密な連携を取り合うことで進展してきた。

さて今年度の当部会の活動であるが、3月の東日本大震災発生を受けて、全美ホームページに「救援・支援活動特設サイト」を設置した。美術館及び文化財に関わる情報を提供したほか、海外向けにも会員館の被害状況を英語版で公開した。被災地では震災後半年を経過してもいまだ長期的な支援を必要とする状況が続いており、今後も継続的な情報提供に努めたい。

また並行して現在、全美ホームページの大幅なリニューアルに向けた作業を進行中である。CMS（コンテンツ・マネジメント・システム）の導入がそれで、トップページやメニュー構成の変更をはじめ、コンテンツの更なる精査と情報掲載の効率化を果たすことで、ホームページをより充実したものにしていきたいと考えている。来春の公開をぜひ楽しみにしていただきたい。

全国美術館会議ホームページ
http://www.zenbi.jp/

全国美術館会議ニュース研究部会

尾﨑信一郎（鳥取県立博物館）

ニュース研究部会はしばらくの活動休止の後、2008年12月より原田平作前理事を中心に数名の部会員で活動を再開した。それまで、この部会は各館で発行される美術館ニュース等の研究を活動の中心としていたが、新たに全国美術館会議のニュース誌の発行が提案され、その可能性を検討することとなった。2009年3月の部会では京都大学の吉岡洋氏を招いて基調講演を受け、今日、あえて紙媒体で情報を提供することの意味が議論された。その後、2009年度に3回、2010年度に4回の部会を開催し、ニュース誌発行に向けて内容と方法の検討に入った。時に全国美術館会議の事務局も交えて議論を重ねた結果、ニュース誌のタイトルを『ZENBI』とすること、発行の時期や版型と部数、内容としては展覧会等の美術館活動に対する批評を中心とすること、部会の会員を増やして事務局ではなく部会が主体的に編集活動に携わること等が決められた。

ニュース誌の発行については2011年2月の理事会で基本的に了承されたが、同時にいくつかの意見や要望が提起された。これを受けて、3月19日に開いた部会で編集方針に若干の変更を加えた。まずこのニュース誌を全国美術館会議の機関誌と位置づけ、『ZENBI 全国美術館会議機関誌』というサブタイトルを入れた。機関誌としての性格上、各部会からの報告や各ブロックからの報告等も掲載し、比較的知られることの少ない全国美術館会議の活動を広く周知し、全国の美術館をめぐる状況についても随時報告する方針とした。一方、展覧会評等美術館活動全般に対する批評も募り、美術館職員が相互に批評するジャーナリズムの役割も与えることとした。

本年度の活動としては5月に横手で開催された理事会と総会に幹事が出席し、これまでの経緯と発行の方針について説明した。この際には資料として創刊号の内容と投稿規程を配布し、総会の席では出席した学芸員等にも広く協力を求めた。この後、具体的な編集作業に着手し、各理事にブロック報告等の執筆候補者の推薦を依頼し、各部会幹事には部会の報告を依頼した。また投稿規程を全国美術館会議のホームページに掲載して一般からの投稿を募った。このようにして集められた原稿を部会で編集し、このたび『ZENBI 全国美術館会議機関誌』の創刊号が刊行のはこびとなった。

発行にあたっては活動の内容が一部重複するホームページ運営研究部会と協議をもち、速報性とテーマ性といったかたちで相互の役割を分担すること、そのうえでPDF形式のファイルとして内容をホームページ上でも公開していくこと等を決めた。

本誌は今後年2回のペースで発行される予定である。今後は連載記事等も増やし、さらに内容を充実させて、ホームページや各種報告と役割を分担しながら全国美術館会議の活動の一端を担いたいと考えている。インターネット上に無数の感想が発表される一方で美術ジャーナリズムが衰退しつつある現在、本誌が状況に一石を投じることを期待し、そのためにも多くの皆さんから自由な投稿をお待ちしている。

再開第8回全国美術館会議
ニュース研究部会会合の様子
（2011年7月、京都国立近代美術館）

美術館運営制度研究部会

河﨑晃一（兵庫県立美術館）

美術館をとりまく状況は、近年めまぐるしい変化の中にある。予算削減による展覧会活動の縮小の流れから、2003年に導入された指定管理者制度のもと大きな変革を余儀なくされた。新たな手法による美術館運営の時代を共有していくことが望ましいと考え、全国美術館会議は加盟館10数館により、「指定管理者制度研究部会」を2004年に組織化し、その制度の導入についてのメリット、デメリットの論議を経て、美術館の存在意義、将来像また学芸員の処遇等について意見・情報交換を行うことを始めた。それらは、2005年の第20回学芸員研修会、2008年の総会におけるシンポジウム「来るべき美術館運営にむけて〜公益法人制度の変化と指定管理者制度の今後〜」、2009年の第24回学芸員研修会「美術館のいま―著作権・寄贈ハンドブック作成と運営制度―」として開催、議論された。その間にも美術館をめぐる昨今の変革は拡大し、指定管理者制度だけでなく全国の美術館に関連するいくつかの運営に関する改変を考察し、将来に向けてよりよい方向、方策を切り開いていかなければならないと考え、部会の名称を2008年2月1日付けで「美術館運営制度研究部会」に変更した。

活動として指定管理者制度の実態の調査をはじめ、その後新たな動きとなった公益法人制度の改革では、多くの美術館にそれらの情報を提供し、それぞれの館が取り組みを始める出発点となった。ここ2年間は『著作権・寄贈ハンドブック』の作成に集中的に取り組み、美術館学芸員が知っておくべき、あるいは知らなかった時の参考図書となるハンドブックの出版に取り組んだ。これまで美術館が関わる著作権問題に特化した出版物がなく、学芸員にとっては便利で有効な一冊であると自画自賛している。また、東日本大震災支援として4月に開催された部会では、各部会の代表の方々に参集いただき、現状を把握し、今後の支援の方向性を検討した。その後総会での被災地に立地する県立美術館からの報告に続いて、7月には、仙台においてセッションを開催、支援対策をまとめ理事会に提案することとなっている。現時点では、震災復興支援の各館からの支援活動を美術館運営の立場から調整することが、重要課題であることを認識している。

このように美術館運営制度研究部会の活動の幅は広く、会員館の学芸員からは、その内容が見えにくいという懸念がある。今後の研究部会では、部会設立時の原点を踏まえながら、美術館運営の根幹に基づいた運営面での情報交換、情報共有だけではなく、学芸員が美術館の一員として活動するときに必要な知識や考え方を提供し、学ぶことのできる部会を目指している。

北海道ブロック

街全体を舞台にした展覧会と作家の連携

吉崎元章（札幌芸術の森美術館）

北海道内の美術館での震災及び原発事故による直接的影響は、展覧会の開幕延期と中止が各1件あった以外にほとんど見られなかったが、社会全体的な停滞ムードのなか入館者数が延び悩んだ所も多い。そうしたなか、市立小樽美術館の一部が改装され、待望の一原有徳記念ホールが4月2日にオープンしたことは明るいニュースであった。昭和54年（1979）開館のこの美術館は、昭和27年（1952）に小樽地方貯金局として建てられた建物を利用しており、一原自身もかつて貯金局時代に職員として勤務し、地下室で版画制作を始めるなど深い縁をもっている。またオープン記念展として、併設の文学館で俳句や山岳小説の分野でも活躍した彼の足跡を同時に紹介したことも、ここならではの企画として際立っていた。

一方、こうした時期に北海道の美術において特に目立った傾向は、ひとつに街全体を舞台とした展示であり、さらに地元の作家間の連携のもと、森の中や歴史的建造物等を会場とした展覧会が多発したことも挙げられる。いずれも震災前から計画されていたものであるが、当たり前のように自分の周りに存在し続けると思っていたものが一瞬にして失われる現実を目の当たりにした我々にとって、自らが暮らす地の特性や歴史とともに、人と人との絆の大切さを再認識させる内容が一層輝きを増して感じられた。

なかでも「釧路が育んだ世界の画家　増田誠展」は街全体を巻き込んだ取り組みとして注目される。9月初旬から10月中旬にかけて開催された本展は、釧路市立美術館、北海道立釧路芸術館のほか、釧路市内の駅、銀行、ホテル、スーパー等13箇所を会場としている。山梨県に生まれ、30年以上にわたってパリを拠点に活躍した増田は、渡仏前の約10年間、釧路で工芸広告美術を生業としながら制作を続ける時期を過ごした。海外での活動を夢見る彼を当時支援したのが釧路の企業家や個人であり、そのために市内には多くの作品が本人との様々なエピソードをもちながら所蔵されている。今回はそれらに各地の美術館等からの借用を加えた300点以上が各所に展示されたが、一人の画家を官民共同でこれほどの規模で取りあげた例は全国的にも稀であり、世界的な画家を育てた街としての自負を市民が共有する機会にもなったことだろう。

札幌中心部で開かれた「安田侃野外彫刻展」（9月3日～11月20日）も街と深く関わるものである。北海道美唄市出身の安田の彫刻は、すでに札幌市内の要所に大理石による9点が恒久設置されているが、会期中にはさらに20点のブロンズ作品が広範囲に展示された。これまでにもミラノやフィレンツェ、ローマ等で大規模な野外展を幾度も行ってきた彼にとっても、日本の街なかでは今回が初めてとなる。「街に触れる」という展覧会の副題は、思わず触れたり、座りたくなる安田作品の特徴を表すとともに、彫刻を通して街自体を強く意識することを示していよう。札幌は、約140年前にほとんど原野の状態から計画的に碁盤目状に整備された街である。彫刻は、駅前通や大通公園、狸小路等構造上、歴史上重要な意味を持つ都市軸を強調するように配置され、それらを訪ね歩くことによって、作品とともに札幌の街を感じるものとなっている。

作家の連携による展覧会としては、「ハルカヤマ藝術要塞2011」（9月25日～10月22日）を筆頭に挙げたい。会場となった春香山（小樽）には以前観光ホテルや彫刻家・本郷新のアトリエがあったが、30年以上放置され、草木が生い茂る荒地となっていた。その一帯を数年前から地元の彫刻家が借り受けて自力で園路を拓き、呼びかけに応じた道内の彫刻家等55人が木々の間やホテル廃屋等に作品を展示したのが本展である。交通の便が悪く、あまり知られていない場所でありながら、マスコミに多く取りあげられ、7,500人を超える来場者を集めた。荒地をアートにより再生させようとする意気込みと、野趣に富むなかでの自然との共生の試みが多くの賛同を得たのだろう。また、帯広においても築百年の日本家屋を舞台に「真正閣の100日」（5月～9月）が開かれ、週替わりのリレー形式で道内の作家50人余りが参加した。その他にも、苫小牧市立樽前小学校での「樽前arty2011」（8月）や、旧火力発電所での「夕張清水沢アートプロジェクト」（9～10月）、飛生芸術祭（白老、9月）等も同じ流れに位置づけられよう。

もうひとつの話題は、4月の札幌市長選で上田文雄氏が3選を果たし、公約であった2014年度からの定期的な国際芸術展に向けての動きが本格化したことだ。後発となるだけに、いかに独自性を打ち出せるかが課題であり、現在、委員会が組織され、時期、会場、内容等の基本構想が練られている。民間サイドでも、4月に道立近代美術館、10月末に札幌芸術の森美術館を借り、提言というかたちでプレ企画展を行うなど活発化してきている。

ハルカヤマ藝術要塞
渡辺行夫《こもれ紅》

安田侃野外彫刻展
《意心帰》大通公園西三丁目
撮影：並木博夫

東北ブロック

福島からの報告

荒木康子（福島県立美術館）

私の職場、福島県立美術館は福島市内に位置する。福島第一原発事故により、今後何十年も放射能と格闘しなくてはならなくなった福島県は（地域によって差があり、福島市の線量は高い）、他の地域と全く異なった状況に置かれているといってよい。ここでは福島県内を中心に、私自身の知る範囲で震災後半年間の近隣での美術の動きや美術館活動についてご紹介をし、今、一学芸員として考え、感じることをお伝えしたい。

震災直後、美術館がまだ活動を開始できずにいる頃から、すでに作家たちは動き始めていた。福島の地元作家では渡邊晃一が震災直後の4月初めから、早くも「Koi鯉アートのぼり」のワークショップを携えて福島市の避難所をまわり、世界中に呼びかけてその輪を着実に広げていた。県外からは小沢剛の「ベジタブル・ウェポン」（福島ヴァージョン）。丸山直文、袴田京太朗らの避難所でのワークショップ。開発好明の全国巡回するアートキャラバン「デイリリー・アート・サーカス」もプレイベントを相馬市のスポーツアリーナそうまで開催。ヤノベケンジも当館に寄託していた作品で「トらやんの方舟プロジェクト」を開始。写真家の瀬戸正人や津田直も現地で撮影をしていた。他にもたくさんの作家たちが被災地に入っていたし、それぞれのスタンスで行動を起こしていた。「作家たちには、アートの存在意義をここで確かめたいという気持ちが強くあるんだと思う。」という小沢の言葉が印象に残っているが、私たちも同じ思いを抱いていた。しかしこの非常事態の中で、作家とその活動の受け手とをつなぐコーディネートの役割を私たちはどれだけ果たせただろうか。美術の動きは、この時、明らかに美術館の枠組みを大きく越えていたが、美術館としての関わりは限定的だったといっていい。そして個人的にも、日々変わる避難所や被災地の状況を私たち自身が把握することは不可能とはいえ、どこにアプローチをすれば必要な情報が入手できるのか、地元ネットワークとの連携が日頃から取れていれば、もっと迅速にいろいろなことができたのではないかと思っている。

岩手県立美術館では、5月から自分達自身で被害が甚大だった沿岸地域に出向き「『ユメノマチ』ができるまで」というワークショップを展開している。この企画は、開館以来10年間続けてきた「アートデオヤコ」の経験と、これまで築いてきたネットワークが活かされた実践といえる。そして原田光館長の「僕が思っている美術というのは、何か作ったり描いたりする一種の身体行為、そこから美術をまた始めていけるのではないか」という強い思いが反映されている。「いま作ることを美術館が支えていく」という姿勢は、7月2日から開催された20～40代の岩手県若手作家10人の作品展「いまIMAここで展」からも強く伝わってきた。

いわき市立美術館で開催中の「いま。つくりたいもの、伝えたいこと。」も同じようにいわきの作家達25人の展覧会。こちらは新作展である。絶望の淵でしばし呆然と立ちつくしても、それでも手を動かして何かを作る。「僕にはそれしかできない。」という高野正晃。地震、津波そして放射能がどれほど大きな痛手をいわきの人々の心に与えたか、同じ福島に住む者として想像できただけに、こんな早い時期に創作活動が再開できるのだろうかと内心思っていた。しかし創作することで、作家たちは自分自身を確かめ、前に進む力を絞り出していた。もちろんそれぞれの創作のスタンスは異なる。感じ方も違う。しかし創作は生きることなのだという切実なメッセージ、作家達の覚悟は確実に私たちの心に届いた。それは何にも増して、観る者へのエールにもなっていた。展覧会がなければ、この時期、そうした個々の作家達の思いが私たちに届けられることはなかっただろう。展覧会、美術館は、作家、企画者そして観者が何かを共有し確認しあえる場として大きな意味を持つのだ、とあらためて気づかされた。

会津若松市と喜多方市では福島県立博物館ほか主催の「会津・漆の芸術祭2011」が開催されている。昨年から始まったアート・フェスティバルの2回目。漆というキーワードをもとに県内外の作家たちが街の中でアートを展開する。今年は「東北へのエール」というテーマを掲げ、震災直後から動き始めていた。地元の産業でもあり文化でもある漆は、東北の文化を象徴するキーワード、私たちが拠って立つところのシンボルとして、今年はより重要な意味を帯びている。気のせいか「記憶」にまつわる作品が多いような気がした。この現状と漆という素材が交差するところに立ち上がったそれぞれの記憶は、私たちの大きな喪失感の裏返しなのかもしれない。人の記憶、町の記憶、そして民族の記憶としての神話。価値観の再確認は再生へとつながっていくだろう。

ここに紹介したどの試みも、地元、地域との関わり、その中に美術館があるということを強く意識した企画である。これからますますそれは重要だと私自身も思う。放射能しだいでは様々な事態が考えられうる福島の特殊な状況下、地域の人たちに必要とされ、地域の人たちとともに美術館ができることを地道に考えていきたい。

いわき市立美術館「いま。つくりたいもの、伝えたいこと。」展
写真提供：竹内啓子氏

岩手県立美術館
「『ユメノマチ』ができるまで」
ワークショップ 陸前高田市米崎小学校にて
写真提供：岩手県立美術館

関東ブロック

美術館の存在意味を問われる
—3・11 以後、2011 年春夏の美術館活動について

小勝禮子（栃木県立美術館）

あの衝撃的な東日本大震災と福島第一原発の放射能流出事故を抜きには、2011 年の関東の美術館の活動を語ることはできないだろう。むろん、災害の中心地である東北ブロックの美術館に比べれば被害も少なく、復興も容易であるには違いないが、それでも個々の館での強弱はあるにせよ、何か根本的に美術館の存在自体を問い直すような大きな問題であるのは間違いない。そこでこの時評では、震災後の関東の美術館のそれぞれの活動と反響、現在の困難や今後の展望について点綴することとしたい。

3 月 11 日以降、東京や南関東の美術館は 3 月中に再開したところも多かっただろうが、北関東の美術館の多くは建物被害に加えて間もなく実施された計画停電の影響で、しばらく休館する館がほとんどだった。それでも年度が替わって 4 月末から多くの美術館が再開し、ゴールデン・ウィークには来館者を迎えることができた。栃木県立美術館は、予定通り 4 月 23 日から「関谷富貴の世界」展、茨城県近代美術館は 3 月の予定を延期して 4 月 29 日から「ふるさとを描く—いばらき美術風土記」、群馬県立近代美術館は 4 月 23 日から「司修のえものがたり—絵本原画の世界」展、埼玉県立近代美術館はいち早く 4 月 9 日から「アール・ブリュット・ジャポネ展」等である。この中でもやはり震源地から遠い埼玉と群馬は被害も軽微であったようで、再開も早かった。さらに遠くの神奈川県立近代美術館は会期中の「エル・アナツイのアフリカ」展（葉山館）を 3 月 27 日まで開催し、4 月 9 日から鎌倉館で「開館 60 周年 近代の洋画 ザ・コレクション」、16 日から葉山館で「モホイ = ナジ／イン・モーション」展を開催した。しかし東日本沿岸からもっとも遠い山梨県立美術館でも地震と放射能汚染の風評被害のため、4 月 16 日から開催予定だったモーリス・ドニ展への作品貸出がフランス政府の意向で中止となり、急遽、5 月 10 日からコレクション展で埋めることとなった（その後、ドニ展は 2012 年 1—3 月に延期して開催が決定）。海外展の中止や延期は関東に限らず相次いだようだが、神奈川県立近代美術館でも 7 月末から開催予定のモランディ展が保険契約が結べずに中止となり、当初、年度末に開催予定だったコレクションによる現代美術展をモランディの会期に繰り上げての開催となった。そのため、印刷済みの年間スケジュールを刷り直すことになったという。

さらに群馬県立近代美術館でも 12 月から開催予定の「ロシア国立エルミタージュ美術館所蔵 皇帝の愛したガラス」展が放射能被害を恐れる所蔵館の意向で群馬展のみ中止となり、同じ企画会社の「陶酔のパリ・モンマルトル 1880-1910」展に差し替えとなった。

東京電力管内の関東の美術館はほとんど、夏の 7—9 月電力量前年度比 15% 削減を法律で義務付けられた（契約電力 500kw 以上の施設）。これにどのように対応するか各館とも頭を悩ませたことと思う。栃木県立美術館は前年度 480kw であったため国の法律には該当しなかったが、栃木県による 20% 削減目標に従うこととなった。あまりに大きい削減率に戸惑ったが、事務室 28℃、収蔵庫 23℃、展示室 25℃という通常より高い温度設定と、照明器具の間引き、事務用 EV 不使用等の細かい努力で、8 月の消費電力量は前年比 70.1%（電力料金 82.2%）という数字を達成した。しかし特に常設展示室 2F の温度が設定より高くなってしまう日もあり、作品への影響を考えると節電に励み過ぎた点を反省している。事務室も 30℃を越えてしまう日もあった。当館の常設展示室は、国の交付金によって 7 月にすべて LED 照明に転換したが、その節電効果がどのくらいあったかは数字ではわからない（電力消費量全体の数字しか計測できないため）。照明効果は格段に良くなった。

他館もそれぞれの工夫をしたと聞く。収蔵庫や展示室の設定温度は上げず、事務室やロビーの空調を切ったり、温度を高めにした館（茨城県陶芸美術館、茨城県近代美術館、群馬県立館林美術館、千葉市美術館）、展示室の設定を 25℃にし、作品運搬用の大型 EV の使用回数を減らした館（神奈川県立近代美術館 葉山）、収蔵庫の空調を地震時から 5 月下旬まで止め、7—8 月は展示室を 23.5℃～ 25℃、収蔵庫を 23℃～ 24℃に細かく設定を変えて対応した館（山梨県立美術館）、常設展示室の半分を閉鎖した館（群馬県立近代美術館）、アトリエ棟や講堂を使用禁止とした館（千葉県立美術館）等である。

来年夏の節電はどの程度の目標なのか、また今から対応を考えねばならない。

地震による休館の後、美術館を再開した時、来館者の反応はどこもとても好意的であったと聞く。建物被害が大きく、7 月 30 日の「CAFE IN MITO 2011」で 4 か月半ぶりに再開した水戸芸術館では、再開を待っていた観客が多く集まり、水戸市中心部の活性化にも同館の貢献が期待されているという。同じく山梨県の観光資源でもある山梨県立美術館は来年度予算も通常通りだそうだ。しかし県の財政が逼迫する栃木県や茨城県では、県立美術館の来年度運営予算が大きく削減される見通しである。美術館は何のためにあるのか。「美術館に来て、絵を見る人と会えるのがうれしい。」茨城近美の観客の言葉だが、芸術文化を享受できる環境を維持することが行政の務めでもあろう。栃木県立美術館は地震には関わりなく、予算削減により今年からコレクションを中心とした企画展運営となっているが、通常の常設展示と一味違った、新鮮な視点や綿密な調査で県立美術館としての役割を果たしている（「関谷富貴展」、「画像進化論」、「石川寒巌展」）。来年度もまた予算をやりくりしながら、日常を豊かにするアートに出会う場として、新鮮な驚きやときめきを提供して行きたいと考えている。

「画像進化論」展会場、栃木県立美術館、2011 年 7–9 月
撮影：DAGA graphics

東京ブロック

善戦・苦戦・奮戦
—2011年度前半の展覧会を振りかえって

松本透（東京国立近代美術館）

東日本大震災につづく原発事故という史上例のない災禍への対応に追われるなかで、2011年度は明けた。東京ブロックの加盟館に関しては幸いに建物等の被害がひじょうに少なく、ほとんどの美術館は1～2週間の臨時休館を経て4月には開館したが、とはいえ開館時間の短縮や夜間開館の自粛を4月いっぱい続けた館が多い。震災時にすでに開幕していた海外展—「シュルレアリスム展—パリ、ポンピドゥーセンター所蔵作品による—」（2月9日～5月15日、国立新美術館）、「マリー・アントワネットの画家ビジェ・ルブラン展」（3月1日～5月8日、三菱一号館美術館）、「レンブラント光の探求／闇の誘惑」（3月12日～6月12日、国立西洋美術館）の場合でも、主催館は放射線測定・報告等各種対応を迫られたが、「写楽」展（5月1日～6月12日、東京国立博物館）や「アルプスの画家 セガンティーニ」展（11月23日～12月27日、損保ジャパン東郷青児美術館）のように、当初予定の開催時期を延期したケースもあり、また海外展準備中の美術館は、作品所蔵先への状況説明等に追われることになった。展示における地震対策（免震台の使用等）もさることながら、災害時における情報収集・選択・伝達等危機管理のあり方については、少なからず課題を残したと思う。

さて、連休明けから夏にかけて、東京地区では節電問題等をかかえながらも、例年どおりいくつもの大型海外展が開幕した。「パウル・クレー おわらないアトリエ」展（5月31日～7月31日、東京国立近代美術館）、「ワシントン・ナショナル・ギャラリー展 印象派・ポスト印象派 奇跡のコレクション」（6月8日～9月5日、国立新美術館）、「大英博物館 古代ギリシャ展 究極の身体、完全なる美」（7月5日～9月25日、国立西洋美術館）、「モーリス・ドニ—いのちの輝き、子どものいる風景—」展（9月10日～11月13日、損保ジャパン東郷青児美術館）等である。

日本の近代作家の回顧展では、福原義春コレクションによる「駒井哲郎 1920-1976 —こころの造形物語—」展（4月9日～6月12日、町田市立国際版画美術館）、39年ぶりの大回顧展となった「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」（7月17日～9月4日、ブリヂストン美術館）、東京では30年ぶりの「生誕130年 松岡映丘—日本の雅—やまと絵復興のトップランナー」展（10月9日～11月23日、練馬区立美術館）等が開催された。何10万人もの入館者を集める鳴りもの入りの海外展と、若年層を中心に相応の反響を呼ぶ「現代」美術展の谷間にあって、日本の「近代」美術展の相対的地盤沈下が囁かれるようになって久しいが、駒井哲郎展入館者数5,800人余、青木繁展46,000人余という結果は、どちらも内容のひじょうに充実した展覧会であっただけに、あらためて考えさせられてしまう数字だ。

今年度前半は、歴史的に近くて遠い1950—60年代の動向を見直すこころみが目についた。近年再評価されつつある岡本太郎の回顧展（3月8日～5月8日、東京国立近代美術館）や、「具体」の運動とも関係の深い50年代半ばの動向を取り上げた「アンフォルメルとは何か？ 20世紀フランス絵画の挑戦」展（4月29日～7月6日、ブリヂストン美術館）、60年代にコンセプチュアルなコミック風の絵画で注目された岡本信次郎の近作を中心とする個展（8月9日～9月19日、渋谷区立松濤美術館）、丹下健三門下の建築家・デザイナーほかによる都市構想（1960年～）を再検討する「メタボリズムの未来都市展」（9月17日～2012年1月15日、森美術館）等。来年、ニューヨーク近代美術館で日本の戦後美術（1945—70年）の展覧会が開催されると聞くが、「現代」の出発点に当たるこの時代は、まだまだ手つかずのテーマを残すのではないだろうか。

現代美術の専門館が増えたこともあって、建築・デザイン・ファッション等の隣接領域を含む広い意味での現代美術展は、展覧会の一翼として定着してきたようである。30歳代の若い作家の個展が美術館で開かれるようになったこと、日本・欧米一辺倒ではなく、他の地域の芸術へも関心が向けられている点が、この分野の特徴である。1970年キプロス生まれのフセイン・チャラン（4月3日～6月20日、東京都現代美術館）、1975年生まれの名和晃平（6月11日～8月28日、同館）、1971年シンガポール生まれのミン・ウォン（6月25日～8月28日、原美術館）や、イケムラレイコ（8月23日～10月23日、東京国立近代美術館）、畠山直哉（10月1日～12月4日、東京都写真美術館）らの個展のほか、2000年以降の動向にスポットを当てた「ゼロ年代のベルリン」（9月23日～2012年1月9日、東京都現代美術館）や「フレンチ・ウィンドウ展：デュシャン賞にみるフランス現代美術の最前線」（3月26日～8月28日、森美術館）等が開催された。

今年度、サントリー美術館（50周年）、渋谷区立松濤美術館（30周年）、世田谷美術館（25周年）、ニューオータニ美術館（20周年）、根津美術館（70周年）、山種美術館（45周年）等が開館記念年を迎えたことを最後に記しておく。

「没後100年　青木繁展—よみがえる神話と芸術」
ブリヂストン美術館、会場風景

「大英博物館　古代ギリシャ展」
展示より、《円盤投げ（ディスコボロス）》
写真提供：国立西洋美術館

北信越ブロック

常設展の魅力度アップ事業と近隣美術館との連携

杉野秀樹（富山県立近代美術館）

北信越ブロック全般の美術館活動を見わたす文を寄稿すべきなのだろうが、勤務している美術館運営で手一杯の筆者には身に余る役である。よって北信越ブロック美術館との連携をも含むここ数年の当館の取り組みを記すにとどめたいと思う。

当館は本年、開館30周年を迎えた。オープン以来、20世紀の美術を紹介する方針のもと、美術館活動を行ってきた。「20世紀美術の流れ」のタイトルを冠し、ロートレック、ピカソに始まり、シュルレアリスムを経て、戦後の欧米作品へと続く常設展は館自慢の一つである。が、一般の方々に、その常設展はどのように映っているのだろうか。

常設展は、美術館の設置目的あるいは館の個性を端的に語るが、展示作品は大方いつも同じであるから、一度見れば十分と思われがちである。一方、企画展はその都度展示作品が替わるために集客が見込め、年に何本も開かれる。予算も自ずと後者に大きく配分される。当館では企画展観覧券に常設展の半券がついており、お目当てが企画展であっても、常設展も鑑賞できる。しかし実情は企画展だけを見て帰られる方が多い。そこでここ数年、取り組んでいるのが、常設作品を楽しく鑑賞するためのツールの開発と、所蔵品の積極的な活用である。

オープン以来、常設作品の解説等の情報提供をほとんどせずにきた。先入観なしに作品に接してもらう―それを鑑賞の基本とした。しかし「20世紀の美術は難しい」との来館者の声は絶えず、以下の鑑賞ツールを順次加えてきている。

- 作品図版、作家略歴、鑑賞ポイントをまとめた持ち帰り可の一般用、子供用作品解説カードの提供。
- 主要作品の解説パネルの設置。
- 展示替え毎に、常設作品1点を選び、解説パネルよりも詳しく記述した大型パネルの設置。
- 外部の識者や当館学芸員が講師となって所蔵品を論じる「気軽にアート・レクチャー」の実施（年4～5回）。
- 日本語・英語・中国語・韓国語対応の常設作品一般向け音声ガイドと、子供向け音声ガイドの無料提供。

常設展を楽しむためのツールは出そろったと思う。が、常設展に足を向けてもらうための一工夫が必要と痛感している。

一方、所蔵品は、県内の美術普及活動の一環として実施しているさまざまな事業で活用している。例えば本館から10キロほど離れた「ふるさとギャラリー」での展示活動や「学校一日美術館」、「美術館へ行こう」、「ひよこツアー」を挙げることができるが、その詳細は当館の年報を参照していただきたい。

県内向け事業とは別に、ここ数年、常設の主力作品を県外の美術館にまとめて貸し出す機会を作っている。県外の人々に当館の存在と活動を知っていただくこと、これがきっかけとなり当館に足を運んでいただければ、と願ってのことである。しかし「売り込み」を積極的にはしていない。展覧会構成の点で、当館所蔵品のみの貸出の場合もあれば、双方の所蔵品を活用した巡回展、あるいは所蔵品の交換展もあり得る。両館の思わくが一致しないことには成立しない。また館の目玉、主要作品が常設展から外れるのであるから、常設展示計画や利用者への情報発信も課題となる。数年の準備期間が必要である。

さて、主要作品を一括で貸し出す試みは当館では比較的遅く、2008年からである。近隣県の美術館コレクション展開催実績のある新潟県立近代美術館の申し出を受け、当館と富山県水墨美術館の所蔵品を紹介する「西洋の美 東洋の美」展に、ロートレック、ピカソ等の常設主要作品を含む100点を超える作品を貸し出した。

2010年は岐阜県美術館との連携展を実施した。東海北陸自動車道が2008年に全線開通し、北陸圏と中京圏の車での移動時間が飛躍的に短縮された。日帰りドライブでも複数の観光スポットを楽しむことができる。相手方の美術館の紹介をメインに、重要所蔵作品の交換展を開催した。

本年は、開館30周年を記念して収集活動の成果を一堂に紹介することを目的に、常設展「20世紀美術の流れ」の拡張展を全館展示でお披露目する計画を立てた。企画・常設の両展示室を所蔵品だけで構成するのは、所蔵作品点数上は可能だが、中味的には少々物足りない。3館程度のコレクションを有効に活用した巡回展を組織しようと数年前から準備したが、足並みがそろわず、新潟市美術館と当館とで20世紀美術をテーマに今夏から今秋にかけて巡回展を組織した。

ところで、新潟市美術館は作品保全の点で不備があるのではと喧しいほどの論議を巻き起こしたことも記憶に新しい。当館の重要作品を展示する場であるから、準備会議で燻蒸を含む対処法を確認し、万全との判断を下して企画を進めたのは記すまでもなかろう。

この問題は、どの美術館にとっても決して対岸の火事ではないだろう。美術館は、外部から隔離されて存在するものではない。それどころか外に向けて開かれた施設である。作品保全に害を及ぼす要因の侵入を完全に遮断することは不可能である。それを前提に、何をしなければいけないか、何をしておくのがベターなのかを再チェックする契機として捉え、意見交換ができれば各美術館にとって有益となろう。

ヘンリー・ムアの作品を前に、子供向け音声ガイドを聞きながら作品を鑑賞する子供たち

東海ブロック

国際展とその傍らで

天野一夫（豊田市美術館）

現在、私が縁あって住まう愛知県では「あいちトリエンナーレ 2010」（以下、「あいち」と略）が成功裏に終わり、今度は次回 2013 展が始動しつつあるのが、一つの大きな話題であろうか。

先行して開催してきた横浜トリエンナーレは、今回、国際交流基金の資金も廻らなくなり、予算的に、また時間的な体制づくりにも苦慮して、さらに 3.11 の後にもなってしまった。そのことを逆手に取るかのように、必ずしも作家の新作にこだわらずに、所蔵作品とリンクしてのキュレーションとなっていて、むしろスタティックでベタな関係の糸が部屋ごとに張られていたのである。むしろ、玉石混交ながら様々な団体の半ばアナーキーな集合体のような新港ピアでの展示の方に、様々な人々のエナジーが累積していて興味深かったというべきだろう。

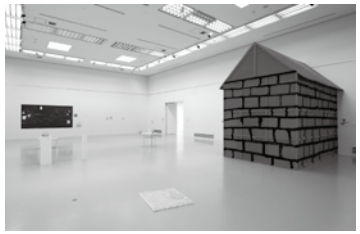
それに対して、昨年の「あいち」（建畠哲コミッショナー）では一回目ということもあって、ホールでのオペラもあれば、比較的小さなスペースや街中でのパフォーマンスや展観も混ざっていて、様々な場の大きさにおいて、パブリックとプライヴェート性との兼ね合いが展開していてそれなりに興味深かった（と言っても、会期中何度もきめ細かく行かねば様々なパフォーマンス等に立ち会う事は不可能なのだが）。

しかし、両者とも今後はこの美術館という場を主体として展開するようで、その際の展開の仕方が気にかかる。日本の行政主導の国際展は他の国に比べて、国家間の政治性ではなく、地方公共団体的性格が強い。その意味では国際展ではないのだが（「あいち」でも国際性ではなく、入場者が、そしてその内県民が何人来たかというデータまで出る—これじゃウチの美術館と同じ発想 !）、ここには節約のための既存の県立を初めとした市立等の美術館やホール等の既存の施設運用という側面がある。しかしそれは美術の美術館への囲い込みにならないか。公立美術館の学芸員なら、言わずもがなだが、そのような素朴で硬直化した地方公共団体の考えを、いかに味付け意味あるラディカルなものに展開するかが腕の見せ所となる。「あいち」でもその性格に沿いながら、パフォーマンスを初めとした総合的な性格を付与したわけだが、街中での展示との好対照を形成して、それぞれの場に対応した展示が試みられていて成功していたのではないか。むろんそれも担当のスタッフたちと作家との共労によって成しえたものだ。横浜でも「あいち」でも、実務は学芸員が担当していることが、いい意味でも悪い意味でも半ば性格を決定している。つまりこれは国際展と言っても、半ば、外部キュレーターを要した大きな美術館企画と言っていい。そのことが後々この国のキュレーション全体を変えるだろうか？そこが要点であるように思われる。

また一方で名古屋では今年、なぜか二つも立て続けにアートフェアが開催された。このような表面的には一見バブリーに見えても、実際のギャラリーは、と言えば、代表的な画廊である白土舎が昨年、そして今年は伽藍洞ギャラリーが閉廊する。中でも前者は、未だ評価の固まっていない作家—その中には若き日の奈良美智もいた—から、1960 年代からの未だ広く知られていない良質な作家まで、実は十数人の比較的少数の作家に絞ったかたちで、地道に継続的に取り扱ってきたのであるが、この地の幾人かの作家はそのまま取り残された状態となっている。

不況の中でも、公的な美術館も何かをやらねばならない。どこであれ、最低限のその場の理解と自由、最低限の予算と、強いヤル気があれば、いい展覧会、美術館活動は出来ると私は昔から思い、人に繰り返し言ってきた。逆に現在は、その一つでも欠けているために出来得ないことが多いのだが、そして巨大展覧会の傍らで、地道に“孤塁を守っている”学芸員がいる事を知ってほしい。立場を度外視して激励を込めて僭越ながらあえてここに個人名を記させてもらいたい。古代史と仏教美術で定評がある四日市市立博物館。ポロック展を実現した愛知県美術館の大島徹也氏。芳賀徹前館長企画の中国、日本近世から始まり、近代を通り現代作家の新作までの大展覧会「桃源万歳 !」展に、さらに近代の奥深い問題を探り一層の奥行きを作った岡崎市美術博物館の千葉真智子氏。さらにこれまでの近代美術関係の堅実な展観に加え、中原淳一、内藤ルネ、宇野亜喜良等の未開拓のサブカルチャー作家の悉皆調査を行ってきた刈谷市（美術館）の松本育子と神谷剛生の両学芸員。そして今更言うまでもないが、名古屋市美術館の山田諭、竹葉丈の両鬼才も未だ健在である。さらには名古屋城の朝日美砂子氏、徳川美術館の四辻秀紀氏以下のオーソドックスな研究も注視すべきであろう。そして何と言っても丹念な研究を基盤に様々な近代陶芸の実相に迫る画期的な知見を披露してきた愛知県陶磁資料館の佐藤一信氏の仕事には、最大級の敬意を表したい。もちろん、ここで挙げた人々はごく一部ではあろう。ただこのような学芸の努力が必ずやこの国の美術を押し上げるだろう。

美術館、画廊、そして作家についても記しておきたい。最近注目した特異な展観が二つあった。今村哲、染谷亜里可、山元ゆり子＋ D.D. によるコラボレーション「二重に出歩くもの」展（愛知県立大学サテライトギャラリー）と、小栗沙弥子他による「From Thank—Cyu ～山中から・もんもんとのつきあいかた～」（名古屋市民ギャラリー矢田）である。殊に、後者は「岐阜県東濃山中に暮らす若者と、山中の中学校で美術科目を担当する女子（30）による、もじもじと出てきた日々の“つくりもの”」と言いながらも、作家名を記していない匿名性の強い謎の私的にして公的な展覧会であった。二展ともに作家名を一旦解消しての、展観としての新しい試みを行っていた。いわば擬似的な博覧会のようなプライヴェートな営為。それは皮肉にも美術館以外の場での伸びやかにして刺激的なものであった。最後に言えば、私は長年、学芸員をしながら、常に否定的な契機を抱え込んで仕事をしてきた。同様の諸志もいるのではなかろうか。



「From Thank—Cyu ～山中から・もんもんとのつきあいかた～」展　会場風景（名古屋市民ギャラリー矢田）

近畿ブロック

関西の美術(館)事情

菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室）

私が所属しているのは美術館の準備室であり、全国美術館会議を構成している活動中の「普通」の美術館とは少々事情が異なっている。しかし、そのようなこれから開館しようという美術館準備室の活動にこそ、良いことも悪いことも現在の美術館のもつ特徴が顕著に表れるのも事実であろう。そのあたりが編集担当の諸氏が私にこのコラムを書かせようとした意図でもあろうと思うので、まず大阪市立近代美術館計画の進捗状況と特徴についてご報告する。

1990年に大阪市は近代美術館建設準備室を設置した。当時は、計画中であった東京都現代美術館、愛知県美術館、豊田市美術館、和歌山県立近代美術館、広島県立美術館といった各美術館と同様に1990年代に開館する予定であった。しかし美術館建設と同時に行われるはずであった周辺開発がバブル経済による土地の高騰で停滞すると同じように足並みを揃えたり、バブル経済崩壊後は市の財政状況の悪化によってまた実質的な建設先送りと、開館予定年度はどんどん遅れていった。その結果、3年前から開館に向けた活動が再開されたとはいえ、21年経った現在でも6年後の2017年の開館をめざして準備中である。計画によれば来年度は建築家の選定、基本設計に着手する予定である。これが現在の状況である。

この間、コレクションの充実に努めたり、大阪市内でコレクションの公開を行ってきたことは美術館関係者の皆さんには周知のことに思うので、そのあたりは端折らせていただく。あえて最近の出来事を紹介すれば、2012年4月より旧サントリーミュージアム［天保山］が所蔵していたグランヴィルコレクションを中心とするサントリーポスターコレクションが寄託になり、当準備室のデザインコレクションは飛躍的に充実する予定である。

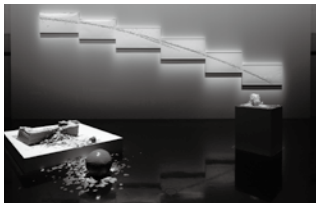
この大阪市の新しい美術館も現在の構想段階から大規模な集客効果と地域貢献を求められているのであるが、これらの点についてすでに実行している近畿圏の美術館・イベントを紹介する。今年、京都市美術館が大型展を同時にふたつ開催したことは、関係者の間では少なからぬ驚きをもって受けとめられた。6月25日から10月16日の「フェルメールからのラブレター展」と、9月13日から11月27日の「ワシントン・ナショナル・ギャラリー展」である。多少のずれはあるものの、9月中旬から約1ヶ月の間、同時開催となった。どちらも20万人から30万人の入場者が見込まれる展覧会で、近年、入場者の上では超大型海外展か小規模企画展かの二極化が話題となっているが、その一方のよい例ではなかろうか。京都市美術館は昭和初期開館の由緒ある建物であるが、その分老朽化も進み、収益はその修繕費になるようである。

アートによる地域貢献といえば、昨年は「瀬戸内国際芸術祭」や「あいちトリエンナーレ2010」、今年は「ヨコハマトリエンナーレ2011」と続いているが、神戸でも「港で出会う芸術祭・神戸ビエンナーレ」が開かれた。2007年、2009年に続く3度目の開催である。ミナト神戸らしく海辺の人工島や港近くの施設、港の一部に面して建つ兵庫県立美術館等が会場となった。先にあげた各地のアートイベントが市民とアートの新しい関係の中でつくられているのに対して、「神戸ビエンナーレ」は華道、書道をはじめとする従来の美術界を行政主導でひと括りにしたといった感が否めず、今後も継続されるのであれば地域の美術館の蓄積を生かし、現代におけるアートの可能性、地域や市民との新しい関係といった視点からさらなる改善が期待されるのではないだろうか。

異なる視点ではあるが民間でもビエンナーレは開催された。大阪の中之島エリアにある堂島リバーフォーラムが主催する第2回の「堂島リバービエンナーレ」がECOSOPHIAをテーマに開催された。国内外で活躍する20名（組）のアーティスト、建築家が参加し、坂本龍一作曲のオリジナル曲が流れる中、彼らのコラボレーション作品等が展示された。

地域へのアートの関わりということでいえば、大阪府主催のおおさかカンヴァス推進事業で合計43作品が今年度大阪府下の公共空間に展示される。なかでも10月22日、23日に大阪城公園で行われた西野達の「おおさかDNA」の展示は、大阪ゆかりの物品を40トンクレーンでつり下げるというダイナミックなインスタレーションで、美術館をはみ出す作品展示という意味でも美術関係者の間で話題を呼んだ。

最後に昨年から今年にかけて関西の美術界は多くのもの・ひとを失ったことを書き留めておく。昨年12月には大阪の信濃橋画廊が45年の歴史に幕を下ろした。いうまでもなく、大阪、関西の美術の発信地として、若い美術家が巣立ち、ベテラン作家が代表作を発表した老舗画廊であった。また同じ時代を生き活躍した作家たち久保晃、森口宏一、船井裕、元永定正（順不同）の各氏が鬼籍に入った。デモクラート美術家協会や具体美術協会等重要な団体に所属した経験をもち、50年以上にわたり大阪・関西の美術界をリードしてきた方々であった。ご冥福をお祈りする。



第2回堂島リバービエンナーレ会場風景
写真：高山幸三

中国ブロック

広島から発信する、オノ・ヨーコの新作メッセージ

神谷幸江（広島市現代美術館）

「広島の空はいつも青いよ」

被爆 50 周年の 1995 年にオノ・ヨーコが作った曲のタイトルのように、8.6 の広島、平和記念式典の日の空は今年も青かった。3.11 に東日本が未曾有の大震災に見舞われ、原発事故による放射能の脅威に私たちは面する事になった。「あの日」から 66 年目を迎えた広島で、3 月の「あの日」の震災を受けて向けられた問いかけは、より重層的な意味を持つ。

西日本は震災地域から距離的な隔たりがあり、変わらぬ日常が続けられる環境にあったが、震災による影響は美術館プログラムにも思いがけない揺れを引き起こした。広島県立美術館では「印象派の誕生」展が中止に。印象派とその源流となる作家の作品を紹介する全 80 点の作品のうち約 6 割をフランス国内の 4 館から貸出を受ける予定だったが、フランス政府が国立及び国立級の美術館に対し美術品輸送の停止を通達し、4 月開催の直前にストップがかかった。豊田市美術館からスタートし鳥取県立博物館に 6 月巡回予定だった「ジョルジュ・モランディ」展、岡山県立美術館での「トーベ・ヤンソンとムーミンの世界展」、島根県立美術館続いて下関市立美術館で計画していた「マルセイユ美術館展」はいずれも欧州の貸出館からの断りで中止となった。

こうした余波が続く夏、広島はオノ・ヨーコを迎えた。1989 年からスタートし、3 年に 1 度平和に寄与したアーティストに広島市が贈っている「ヒロシマ賞」の第 8 回受賞者にオノ・ヨーコが決定したのは昨年。過去には蔡國強、シリン・ネシャット、三宅一生らが受賞者に名を連ねるこの賞の受賞記念展を広島市現代美術館で開催のため、有事に駆けつけるかのようなタイミングでオノは来広した。広島では現地制作、パフォーマンス、レクチャー等精力的に行い、平和記念資料館を訪れ、慰霊碑への献花では長くその手を合わせていた。

広島現美でオノ展を行うのはこれが 2 度目になる。前回は 2004 年にニューヨークのジャパン・ソサエティーからスタートした「Yes オノ・ヨーコ」展が巡回した。こちらの展覧会が 50 年代の彼女の初期の作品から半世紀にわたる活動を回顧したものだったのに対し、今回は震災を受けての返答となる大型の新作インスタレーションが中心となった。当初オノは今回の展覧会を「長崎への道」と名付けていた。平和活動家として怒りの広島だけでなく、祈りの長崎について、この機会に同様に考えたいのだと計画していたのだが、そこに 3.11 が起きる。オノは、展覧会をより広く、喪失から再生へ向かった広島から今発信するメッセージにしようと、タイトルを「希望の路」へと変えプランを練り直したのだった。言葉やものの断片から見る者の想像力を呼び起こすオノの作品は、例えば「Yes」という言葉に代表されるように、詩的で軽やかな肯定の意識を持つものだが、新作はむしろ深い痛みを想起させることで「平和」や「希望」を祈るように唱え、破壊や絶望に抵抗するシンプルにして揺るぎないメッセージを発した。

ペンキのはがれた古い木製のドアが 2 室にわたって複数並ぶ《とびら》（2011）は、実はオノがジョン・レノンと暮らし、彼を目の前で失った場所でもあるダゴタハウスの使われなくなったドアを用いている。傷み、壁からはぎ取られた跡に、愛する人を失ったことの記憶と長い時間の経過が重なる。しかしドアは未来のどこかに繋がる路を暗示してもいる。オノのインストラクションに倣って青空の元で私たちは願いを書き、《ウィッシュ・ツリー》に結んで託すと、2 ヶ月に及ぶ会期中、願いの実はたわわに実った。作品はいずれも想像することが生きることの力になることを一貫して発する。それはポジティブな思考を伝えんとする私たちへのセラピーであり、78 歳を迎える彼女が、脇目も振らず直球で投げるメッセージであった。

2011 年、広島現美の最初の個展は英国出身のサイモン・スターリングで幕を開けた。スターリングは当館所蔵のヘンリー・ムーアの彫刻作品《アトム・ピース》が、原爆開発のきっかけともなった実験成功の記念碑としてシカゴにある作品の原型であるという奇異な繋がりから、ムーアという巨匠を巡る冷戦時代の物語をなんと能仕立てにし、芸術と政治との関わりの糸を手繰り現代の視点から見つめ直した（「サイモン・スターリング：仮面劇のためのプロジェクト（ヒロシマ）」）。そして震災から半年以上が経ち、穏やかな日常が戻りつつありながら、危機が叫ばれ、希望を持てといわれながら絶望が語られる、ちぐはぐで分裂した空気に包まれた今を、しりあがり寿は秋山祐徳太子との 2 人展で、マンガというコミカルな表現とトレースした震災の映像を交互に挟み込み絶妙に表現する（「秋山祐徳太子＋しりあがり寿：ブリキの方舟」）。喪失と再生を体験した広島で、今この地で考えるべきことにアーティストたちは真摯に向き合い、展覧会を通じて発信している。

《ウィッシュ・ツリー・フォー・ヒロシマ》
2011
©Yoko Ono
撮影：元 圭一／提供：広島市現代美術館

オノ・ヨーコと新作インスタレーション《とびら（THE DOORS）》（部分）
2011
©Yoko Ono
撮影：元 圭一／提供：広島市現代美術館

四国ブロック

芸術祭以後の四国・瀬戸内

中田耕市（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）

昨年の夏から秋にかけて、瀬戸内の島々を舞台に開催された瀬戸内国際芸術祭を記憶に留めている方も多いのではないだろうか。この芸術祭は主催者の予想を超えて90万人を超える来場者を集め、成功の内に幕を閉じたが、現在は2013年の次回開催に向けて準備が着実に進められていると聞く。その一環として本年も、一部作品の公開をはじめ、ワークショップやコンサートといったさまざまなシーズンイベントが開催された。

この芸術祭の成果あるいは課題については主催者によって引き続き検証されると思われるが、四国内や周辺地域の美術館にとっても、大規模な芸術祭とどう関わり、周辺の美術館との相互連携をどのように進めるべきかなど考えるべき点は多い。こうした経験が今後の各美術館の運営に活かされることを願いつつ、ここでは現代美術を中心に、芸術祭以後の四国ブロックにおける美術館の活動についてご紹介したい。

「杉本博司 アートの起源」
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

芸術祭終了後の昨年11月より、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館においてある画期的な取り組みがなされた。1人のアーティストを1年間にわたって4つの展覧会を通して紹介するという、おそらくは世界でも初めての試みである。杉本博司はこのプロジェクトを通じて、人間の想像力の発露たるアートが人類史上いかなる役割を果たしてきたのかを問い直し、さらに自身がアーティストとして今、何を為せるのかといった問いを自らに課した。この問いに対して、杉本は人間の奥底に根ざすものとして科学、建築、歴史、宗教という4つのテーマを選び、そこから「アートの起源」に迫ろうとしている。

初回の「科学」では、プリズムで分光された太陽光をポラロイドカメラで撮影した新作シリーズ〈偏光色〉が展示室に未知の色彩世界をつくりだし、近年集中的に取り組んでいる〈放電場〉のシリーズやそこから派生した《ファラデーケージ》が放つ光は、科学とアートが同根であることを意識させる。続く「建築」で杉本は蝋燭の一生を長時間露光で写し取った《陰影礼賛》を実際の蝋燭が灯された空間に展示し、建築の起源を太古の炎の記憶に重ね合わせた。さらに「歴史」では、人類が生命維持のために開発し、社会化に寄与しながら発展させてきた衣服の歴史を20世紀という時代で切り取ったシリーズ〈スタイアライズド スカルプチャー〉が国内で初めて披露され、最終回の「宗教」では、仏教の世界観・宇宙観を示す五輪塔を光学硝子で成型し、その内部に《海景》のフィルムを封印した新作《海景五輪塔》が発表されるなど、それぞれの展覧会で杉本の新たな展開が提示されてきた。

また、4期1年の会期を活かして、あるいは各回の展覧会に関連してさまざまなプログラムも実施された。そのひとつである「コーポレーション・デイ」では地域連携に主眼が置かれている。地元企業から協賛を募り、月1回のペースで観覧無料日を設定するという試みは地元企業の地域貢献活動と展覧会支援を直接結びつけ、新しいかたちの企業協賛の仕組みを創出しようとするものであった。

また「科学」では安藤洋子が、「宗教」では首藤康之がそれぞれの展覧会にちなんだ新作のダンス・パフォーマンスを上演し、「歴史」では〈スタイアライズド スカルプチャー〉に囲まれた空間でmatohuによるファッションショウが行われた。他ジャンルのクリエイターが杉本作品に感応し、展示空間を舞台に見立てて新たな作品を生み出す。これは近年、舞台芸術への関心を深めている杉本の活動ともリンクするとともに、美術館という空間に対する意識をあらためて喚起するプログラムとなった。

「小谷元彦展―幽体の知覚」
高松市美術館

一方、高松市美術館では芸術祭と同時期に開催された「森村泰昌モリエンナーレ／まねぶ美術史」に続き、本年度も企画展として現代美術を意欲的に採り上げている。夏期に開催された「小谷元彦展―幽体の知覚」は、森美術館での同名の個展をベースにしつつ、展示空間に合わせて再構成されており、初期から新作まで、彫刻をはじめ写真や映像等多様なメディアを用いる小谷の活動を一望できる良質の展覧会であった。小谷の作品には観るものの潜在意識を揺さぶるような異形の表象が登場するが、近年ではそれがさらに不可視のものの知覚化へと進行している様子がうかがえ、また、この過程でいっそう空間への意識が先鋭化しているように見受けられた。展示空間には濃密な「気配」が立ちこめ、進むに従って観るものはその「気配」を纏っていく。そして最後に展示された体感型のインスタレーション《インフェルノ》の中で「気配」は一気に流し落とされる。まさにカタルシスの瞬間を知覚する構成であった。

高松市美術館の展示空間をあれほどまでに劇的に変えたアーティストはおそらく彼が初めてではないだろうか。アーティストの要望に応えて空間を仕上げた担当学芸員の熱意と努力に敬意を表したい。

これ以外にも徳島県立近代美術館では独自企画として「森口ゆたか―あなたの心に手をさしのべて」（4月29日～6月26日）が開催され好評を博し、今後も高知県立美術館では「写真家・石元泰博の眼―桂、伊勢」（10月30日～12月18日）が予定されるなど、四国ブロック内ではそれぞれの美術館の特性を活かした意欲的な企画展が催される。

本年度以降も四国の美術館とそこから発信される諸活動にぜひご期待いただきたい。

《海景五輪塔》 2011年
五輪塔：2010年／海景：ボーデン湖、ユトヴィル 1993年
©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

九州ブロック

面的な情報発信は可能か？
—連携進む九州の美術館

山口洋三（福岡市美術館）

多くの美術館の台所事情の厳しさは九州地区においてもあてはまる。しかしながら、今年（2011年）は、九州の主要な美術館が当地にゆかりの美術家の個展や回顧展の開催に力をいれ、作家の、そして美術館が本来持っている（はずの）底力を見せつけた。そして、それらのうちいくつかの企画が、美術館同士の連携にまで踏み込んだ。ここではそのようないくつかの連携の例を報告したい。

私の属する福岡市美術館は、長崎県美術館と共同で「菊畑茂久馬回顧展 戦後／絵画」を企画、同時期に2館で開催した。つまり2会場でひとつの展覧会を開催したわけである。しかし特急電車や高速バスを使っても2時間以上かかる距離をどう埋めるか、そして版画をのぞけば各1点しかない作品群をどのようにふりわけるか？—単館開催や巡回ならば考えなくてもいい課題が浮上する。これらの問題は、私と長崎県美の野中明氏との緊密な連携により乗り越えることができた。まず前者。これは、どのように両館をつなぐか、ではなく、両館とも訪問する来場者は基本的に少数であろうという前提に立って考えた。つまり、ふたつでひとつの構成となる展覧会でありながらも、それぞれの展示が独立したものとして見えるように工夫をした。これが後者の課題の解決につながる。回顧展なので、当然ながら年代順展示がまず念頭に浮かぶが、これをそのまま2会場での展示に当てはめれば、前編／後編という構成になる。しかしこれでは1会場しか観覧しない（できない）来場者に対しては不親切となるため、いずれの会場においても、初期作品から最新作までを網羅するという視点を持ちつつ、それぞれの会場にテーマ（「戦後」「絵画」）を設定。その結果、福岡においては、九州派時代から1960年代、そして約20年間の「沈黙期」にも焦点をあて、菊畑氏がオブジェを経て絵画「天動説」に至った経緯を年代順で示した。

長崎では、1960—70年代の作品を少数展示して導入としつつ、新作となる「春風」を中心に200号サイズのシリーズ絵画を、時代を遡るように展示した。これは図らずも両館の会場の特質を生かした展示ともなり、同じ作家の展覧会でありながら、全く雰囲気の異なる展覧会を開催できた。

福岡県立美術館で開催された「池田龍雄 アヴァンギャルドの軌跡」では、第二会場として、現代美術作家の活動拠点である「共同アトリエ3号倉庫」が使用され、こちらには池田の近作が展示された。また同館の呼びかけにより、福岡市美術館、熊本市現代美術館、長崎県美術館、佐賀県立美術館が、会期を合わせて各館所蔵の池田龍雄作品を常設展示した。

生誕100年記念の「坂本善三展」は、熊本県博物館協議会合同企画となっていて、熊本県立美術館、熊本市現代美術館、宇城市不知火美術館、つなぎ美術館がそれぞれの所蔵作品を展示。同県小国町の坂本善三美術館は、熊本県外の公立美術館に所蔵される大作群を「里帰り」させた企画展を開催した。こちらも菊畑展同様に、複数館でひとつの展覧会を実現させたのである。

企画展以外でも、連携は進んでいる。福岡市の3つのミュージアム（福岡市美、福岡アジア美術館、福岡市博物館）は、昨年度より「福岡ミュージアムウィーク」を開催。5月18日（国際博物館の日）を含んだ2週間は、各館とも常設展示を無料とし、講演会等の催しを開催して、3館の連携を深めている。今年度からは福岡県立美術館も加わり、今後の広がりが期待される。

連携は九州圏内に限らない。福岡アジア美術館と長崎県美術館は、韓国・釜山市立美術館との連携を深めている。アジ美と釜山美はすでに両館の所蔵品交換展を開催したし、長崎の方は主に教育普及の分野で協働している。長崎はスペイン美術への取り組みという観点から、スペイン・プラド美術館と間で協定を交わし、職員の相互派遣等に取り組んでいる。

こうしたローカルでインターナショナルな連携と交流が、実りをもたらすかどうかは今後の継続と展開にかかっていることはいうまでもない。元々情報発信力の弱い地方美術館同士、互いの持ち分を活かしての連携は歓迎されるべきだろう。東京に比して人口も少ない都市の、比較的小さな美術館が多数存在する九州にあって、相互の連携は予算や人員の少なさをカバーし、小さな展覧会や事業に広がりを持たせてくれるからである。事実、菊畑展も坂本展も、1館だけでは到底カバーしきれない質量を誇る作家の全貌を、展覧会の複数館による同時または連続開催とすることで紹介できたのである。

しかしながら、残念な点もある。これは当館にも大いに当てはまることでもあるが、当事者が事業の企画と慣れない連携に関する雑務に追われていることもあり、広報宣伝が今ひとつ行き届いていないように思えるのである。九州外はともかく、九州内において互いの館の取り組みすら知らないままに今年を終えようとしている学芸員も多いのではないか。これらの情報を互いの美術館スタッフが共有できれば、互いの館の実力についての知見を得ることができ、そして展覧会の内容を正当かつ多面的に検証できたはずだ。またこれらの情報をまとめて発信できていれば、九州ゆかりの美術作家の層の厚さと実力を九州の外に向かって発信できたかもしれない。点で存在する各美術館をつなぎ、面でとらえる発想が、九州の美術館に求められることなのではないだろうか。これだけ連携が進んでいる現状があるのだから、決して不可能ではないと思う。

「菊畑茂久馬回顧展 戦後／絵画」の展示風景（左：長崎県美術館、右：福岡市美術館）

新規会員館紹介

市民に支えられるプチギャラリー

no. 1

七戸町立鷹山宇一記念美術館

〒039-2631　青森県上北郡七戸町字荒熊内 67-94

TEL: 0176-62-5858
FAX: 0176-62-5860
E-mail: info@takayamamuseum.jp

［開館時間］
午前 10 時から午後 6 時まで（入館は午後 5 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合は翌日休館）
年末年始
展示替え休館（特別展の前後に展示替え休館あり）
館内整備休館（1 月下旬～ 2 月上旬に 2 週間程度の整備期間を設ける場合あり）
特別展により、会期中無休の場合あり。

［開館時期］1994 年 8 月 1 日

当館は、「現代日本の稀有な幻想画家」と称された、七戸町出身の洋画家･鷹山宇一の画業を顕彰し、その神髄にふれていただくために、1994 年 8 月 1 日に開館した。画伯の生涯を貫く、深き緑の探求のうちに幻想の蝶あり、花あり……。初期から晩年までの油彩・木版・素描等の作品をはじめとする、鷹山宇一に関する資料を展示している。そのモチーフや透明感ある鷹山の世界をご鑑賞いただきたい。また、七戸ゆかりの画家である鳥谷幡山、平野四郎、上泉華陽各氏の作品も収集・調査・研究を行い、折に触れて紹介している。

鷹山は、充実した制作活動と同時に、長年にわたりオイルランプを収集してきた。洋画家としてはもとより日本有数のランプコレクターとしても著名な鷹山の、他に類をみない華麗なコレクションから、19 世紀後半の西洋の装飾卓上ランプ、フロアランプ、そして明治後期日本の座敷ランプ等を紹介している。また､天井のドームには池内康氏の遺作となったステンドグラスが装飾されており、透過する心地よい光が部屋の雰囲気をさらに高めている。

加えて当館では室町時代の創建とされ、人々の信仰の拠り所として今に伝えられる七戸町の古刹見町観音堂と小田子不動堂の両御堂に奉納された江戸時代を中心とする小絵馬や羽子板等の資料も収蔵している。これらの資料はこの地方とふたつの御堂をめぐる庶民信仰の実態と推移を知るうえでも大変重要であることから、1990 年、国の重要有形民俗文化財に指定された。これらはいずれも、子々孫々、後世へと伝えていかなければならない貴重な文化財である。見町観音堂と小田子不動堂のご協力のもと絵馬館で保存・管理するとともに、その有り様を広く多くの方々に伝えるため一部を公開し紹介している。

さらに世界の巨匠ゴヤ、ピカソ、ミロを生んだスペインという風土の原点にある素朴な生活雑器も展示している。日本の北の地に、遠いスペインから運ばれてきた古い陶器は、民衆レベルで感応し合う共通の思いを語りかけてくれることであろう。また、建築家ガウディ設計の椅子（レプリカ）も展示しており、その確かな座り心地を体感することができる。

（戸舘昭吉）

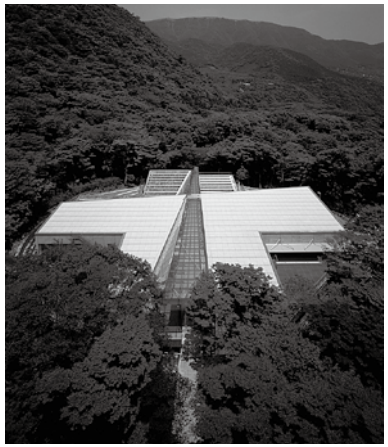
新規会員館紹介

森に溶け込む美術館

no. 2

公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

〒250-0631　神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山 1285



TEL: 0460-84-2111
FAX: 0460-84-3108
E-mail: info@polamuseum.or.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
年中無休（展示替えによる臨時休館・休室あり）

［開館時期］2002 年 9 月 6 日

公益財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館は、2002 年 9 月神奈川県箱根仙石原に開館した。総数約 9,500 点におよぶポーラ美術館のコレクションは、ポーラ・オルビスグループのオーナーであった鈴木常司（1930-2000）が 40 年余をかけて収集した美術作品である。コレクションの核は、モネやルノワール等の印象派絵画をはじめ、セザンヌやゴーガンらポスト印象派絵画等の 19 世紀絵画、モディリアーニやレオナール・フジタ（藤田嗣治）等のエコール・ド・パリの画家たちの絵画、そしてピカソ、カンディンスキーらの 20 世紀絵画までを中心とした西洋絵画約 400 点である。また黒田清輝や岸田劉生等の日本の洋画、杉山寧や髙山辰夫、平山郁夫等の現代日本画、東洋陶磁、日本の近現代陶磁、ラリックやガレ等のガラス工芸、化粧道具も多数収蔵しておりコレクションの幅は大変広い。ポーラ美術館は、これらのコレクションを年 2 回の企画展示と常設展示を通して紹介している。

美術館は富士箱根伊豆国立公園内に位置しており、その中でもブナやヒメシャラが群生する非常に自然度の高い場所に建設された。建築の設計は日建設計の安田幸一氏が手がけ、設計に際して「箱根の自然と美術の共生」をコンセプトに掲げた。周囲の環境との調和を図るために、建物を円形の堀の中に埋め込むことで構造のほとんどを地下に置き、森の中に溶け込むような形をとっている。この円形の堀によって建物を土地から独立させることで、地震や地熱、火山性ガス等の自然の脅威から美術館を守っている。また、この堀の形状を円にすることで地下の水脈を遮断しないよう配慮している。

本年度は企画展として「レオナール・フジタ 私のパリ、私のアトリエ」（3 月 19 日～ 2012 年1月 15 日）を開催している。本展に際して、当館の調査は光学調査の結果に加え、土門拳がフジタのアトリエで撮影した写真資料から、1942 年のフジタが画材として和光堂のベビーパウダー「シッカロール」を使用していることを明らかにした。フジタが油彩画の表面に水性の墨で線を引くためにタルクを使用していたことは近年の研究で明らかになっていたが、この撮影が行われた時期には、この目的のためにタルクを主成分とする「シッカロール」を使用していたことがわかった。本展の中では、いまだ謎に包まれたフジタの技法の謎を解く鍵として、調査研究の結果も交えながら、レオナール・フジタの全体像を紹介している。

（東海林洋）

新規会員館紹介

地域に根ざした森のある美術館

no. 3

中村研一記念 小金井市立はけの森美術館

〒184-0012　東京都小金井市中町 1-11-3

TEL: 042-384-9800
FAX: 042-381-5281
E-mail: hakenomori-art@nifty.com

［開館時間］
午前 10 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝祭日の場合は翌平日）
12 月 29 日～ 1 月 3 日
展示替期間
※施設改修工事のため
2011 年 9 月 20 日～ 2012 年 3 月（予定）は休館

［開館時期］2006 年 4 月 1 日

中村研一記念小金井市立はけの森美術館は、財団法人中村研一記念美術館（1989 年開館）から 2004 年に作品・建物・敷地の寄贈を受けて、2006 年 4 月に小金井市立の美術館として開館した。現在の職員構成は非常勤の学芸員 3 名と事務員 1 名と少ないながら、学芸顧問と市の所管部署が学芸・事務のそれぞれをサポートする体制となっている。

当館は洋画家・中村研一（1895-1967）のかつての自宅敷地内に建ち、庭であった「美術の森」緑地には中村の旧居（現在は喫茶棟として使用）及び茶室が残っている。

所蔵作品は、中村を中心とした日本近現代の絵画、陶芸、資料等約 800 点。開館以来現在まで作品購入は行っていないが、財団運営時代以来「中村研一の美術館」として認知されてきた事から、中村及び関連作家の作品寄贈を受ける機会に恵まれ、少しずつコレクションを拡充してきた。

展覧会は年 3 ～ 4 本、所蔵作品展と企画展をほぼ交互に開催している。これまでに開催した企画展は、主にふたつの系統に分けられる。ひとつは、他地域の美術館が持つ個性的なコレクションによって構成する近現代美術展。もうひとつは、当館周辺を舞台とした小説・映画や、小金井市を拠点とする江戸糸あやつり人形劇団等、ファインアートにとどまらない地域と関連した企画である。また、1 階展示室で企画展を開催している期間でも 2 階の小展示室では常に中村の作品やパレット・画材、作品のモティーフとなった愛用品等を公開しており、1 階の展示替に合わせてこちらも内容を変えている。

当館は、地域に根ざした美術館を目指し、開館当初より教育普及活動にも力を入れてきた。市立小学校の 4 年生全員を対象にギャラリートークを行う鑑賞教室のほか、年 1 ～ 2 回、ワークショップを実施している。これらを継続していく中で、かつての参加者が再度美術館を訪れる例が年々増えており、手応えを感じている。

当館の建物は、かつて中村の遺族の住居として使われていたスペースを含み、また竣工から 20 年を越えて一部設備の老朽化が目立ってきた。このためハードウェアの面で活動を制限されることが多かったが、開館から 5 年を迎えたのを機に、バックヤードを整備しワークショップや講座・講演のためのスペースを新設する改修工事を行うこととなった。改修は 3 年計画で段階的に行われる予定で、それに合わせて当館の事業も、改善と一層の充実を図っていこうとしている。

（荒木 和）

新規会員館紹介

活力ある社会の形成に寄与する美術館

no. 4

佐久市川村吾蔵記念館

〒384-0412　長野県佐久市田口 3112

TEL: 0267-81-5353
FAX: 0267-81-5355
E-mail: gozo@city.saku.nagano.jp

［開館時間］
観覧
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）
多目的室
午前 9 時から午後 9 時まで（予約制）

［休館日］
毎週火曜日・年末年始・ほか臨時休館

［開館時期］2010 年 3 月 30 日

佐久市川村吾蔵記念館は、2010 年 3 月に長野県佐久市の龍岡城五稜郭公園の一角に開館した。地元出身の彫刻家・川村吾蔵（1884-1950）の業績を顕彰し後世に伝えていくとともに、美術に関する市民の知識及び教養の向上を図り、創造的活動への参画を通じたさまざまな交流の機会を創出し、もって心豊かな市民生活及び活力ある社会の形成に寄与することを目的としている。

建設のきっかけは、海外で活躍した彫刻家の川村吾蔵を、もっと多くの人に知ってほしいという地元からの強い要望による。作品や資料等は、すべて川村吾蔵のご遺族より寄附をいただいたものを収蔵している。常設展示では、吾蔵作品を代表する乳牛のブロンズ彫刻や親交があった野口英世等著名人の彫刻、制作に用いた道具類等を展示している。

川村吾蔵は、佐久市（旧臼田町）の出身で、彫刻家を志し 1904 年に 20 歳で渡米。ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン、エコール・デ・ボザールで学んだ後、アメリカで活動する。ニューヨークで師事したフレデリック・W・マクモニスと共作した大規模彫刻等で高い評価を得ており、また、ツルータイプと呼ばれる理想体型の乳牛模型の制作により「牛のGOZO」として知られるようになる。日米の対立が深まったため 1940 年に帰国するが、思うように制作活動ができないまま、郷里臼田に疎開中に太平洋戦争終戦を迎える。軽井沢周辺等で進駐軍の通訳に当たる中、彼が彫刻家「GOZO」であると米軍将校に知られるようになり、アメリカ軍横須賀基地の美術最高顧問に迎えられた。横須賀では、主にマッカーサー元帥をはじめとする将校らの胸像を制作したが、1950 年に横須賀で生涯を閉じた。

当館では、吾蔵とその作品を多くの人に知ってもらうため、来館者に対し展示品の解説を行なっている。調査研究に関しては、国内外ともに作品の所在が十分に把握できておらず、実態の調査が優先課題となっている。その業績とは裏腹に、今日、彫刻家「川村吾蔵」の名が広く知られているとは言いがたく、生涯や作品群についてもまだ明らかでない部分が多い。情報をお持ちの方は、ぜひとも当館までご一報いただきたい。施設活用、学校教育や美術振興への寄与といった面においても、未だ手探りの状態にある。今後、当館の活動を通じて市民生活の発展に繋げられるように、新たな試みや他館との交流等も活発に行なっていきたいと考えている。

（三石敏政）

Think global, Act local

no. 5

松本市美術館

〒390-0811　長野県松本市中央 4-2-22

TEL: 0263-39-7400
FAX: 0263-39-3400
E-mail: museum@city.matsumoto.nagano.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）
※企画展によって開館時間が変更になる場合あり。

［休館日］
月曜日（祝日の場合はその翌日）
※企画展によって開館する場合あり。
年末年始

［開館時期］2002 年 4 月 21 日

JR 松本駅から、まっすぐ東に向かって伸びた大通りを 12、3 分歩くと、左手にこんもりした木立がある。緑陰の下を湧水の巡る敷地に、黒い壁をバックにした極彩色の巨大オブジェが人目をひく一角…、松本市美術館である。オブジェは、松本市出身の草間彌生の作品《幻の華》。美術館建物は宮本忠長氏の設計によるもので、和風とモダンが調和した佇まいは、行燈のようなやさしい夜のライトアップと併せて、この街のイメージを具現しようとしたものである。

当館は市民の長年の願いが形となって 2002 年に開館した。街の中心部に近く、多くの人が利用しやすい立地であり、概要としては、敷地 10,000㎡余り、床面積約 7,800㎡の 3 階建。常設展示室（3 室・約 1,000㎡）、記念展示室（2 室・約 500㎡）企画展示室（約 1,000㎡）の各室で、館のコレクション展、自主企画展、巡回企画展等を開催している。一般市民の発表、また子供から大人までの教育普及は、市民ギャラリー、講座室・アトリエ、大型スクリーンのある多目的ホール、さらに美術情報図書室や芝生の中庭等も利用して行っている。

郷土ゆかりの西郷孤月（日本画）、石井柏亭（洋画）、宮坂勝（洋画）、細川宗英（彫刻）等の作品を収蔵し、年 3 回のコレクション展を開催。記念展示室には松本出身の書家・上條信山の書作品、光風会でながく活躍し、信州の山を多く描いた田村一男の油彩画を入れ替えしながら展示している。草間彌生の貴重な初期作品をはじめ立体、版画、コラージュ等の常設展示もまた松本市美術館ならではといえるであろう。

松本市の掲げる、岳都、学都、楽都というイメージを大切にし、Think global, Act local の姿勢で活動を続けている。

（小原直樹）

地域に親しまれる緑豊かな憩いの美術館

no. 6

清須市はるひ美術館

〒452-0961　愛知県清須市春日夢の森1番地

TEL: 052-401-3881
FAX: 052-408-2791
E-mail: kh-museum@city.kiyosu.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで
（入館は午後 4 時 30 分まで）
※企画展によって開館時間が変更になる場合あり。

［休館日］
月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始

［開館時期］1999 年 4 月 3 日

当館は、愛知県の旧春日町によって設立され、1999 年 4 月に開館した。その後 2009 年に旧春日町が清須市と合併したことから、名称を「清須市はるひ美術館」と改め、新たに再スタートを切ったところである。

場所は名古屋から電車でわずか 7 分のところに広がる静かな田園地帯。桜並木が美しい五条川のほとりに位置する当館は、広場や多目的ステージのある、はるひ夢の森公園の一部として整備され、緑豊かな憩いの場を構成している。この公園では遊ぶ子どもの歓声が聞こえ、美術館には学校帰りの小学生が気軽に訪れるなど、地域に親しまれている。また、来夏には当館に隣接して清須市立図書館（仮称）のオープンが予定されており、文化拠点としての役割がいっそう期待されている。

さて、美術館自体についてご紹介しよう。1 階に 2 部屋ある展示室のスペースは小ぶりなものの、2 階には 360 度の風景を楽しめるガラス張りの開放的なオープンスペースを備え、居心地の良い空間を提供している。これまで折に触れ、小規模館の機動力を生かして、独自の企画展や海外作家の顕彰等幅広く行ってきた。また、地域にゆかりのある作家の紹介にも努めてきた。

そうした中、当館の活動を特色付ける核とも言えるのが、開館当初より続けてきた絵画の公募展である。2 年に一度のビエンナーレとして始まったこの公募展は、途中 3 年に一度のトリエンナーレへと装いを変えて現在までに計 6 回を数えた。この秋には、「清須市第 7 回はるひ絵画トリエンナーレ」として作品の応募を呼びかけている。一般的に、公募展はその継続の難しさが指摘されるところであるが、当館では回を重ねるごとに名が知られるようになり、応募作品数は毎回増加の一途をたどっている。第 6 回は初回と比べると応募総数が 2 倍以上に増え、全国の幅広い年齢層より作品が寄せられた。

とは言え当館は設立からまだ 10 年あまり。地域性、設備面を含めた環境、人材等の特色を生かした上で、当館にふさわしい館のあり方とはどういうものなのか、今後も模索していきたい。

（喜田早菜江）

全国美術館会議　事務局からの連絡

1952（昭和27）年に設立された全国美術館会議（全美）も本年には還暦を迎えるに至り、会員数も364館に達するまでに発展してきました。国立西洋美術館が全美の事務局を引き継いでからも既に5年以上が経過しましたが、企画委員会に置かれた7つの研究部会を中心に、年々活動が活発になり、全国の美術館活動の振興に大きく貢献してきています。全美設立以来の活動の歴史については、別途連載がなされますのでそこに譲ることとして、ここでは全国の美術館及び全美を巡る状況のうち、特に昨今の重要な事象を中心にご報告します。

まず、3月11日に発生した東日本大震災により、東北、北関東地域の美術館、博物館施設をはじめ、様々な場所で保存されてきた文化財、美術作品が数々の被害を蒙るとともに、震災復興予算の確保のため美術館予算が大幅に削減される等、美術館活動にも多大の支障が生じています。また、震災により惹起された東京電力福島第一原発事故により、展覧会の中止、延期を余儀なくされる等、今でも美術館活動に甚大な影響を及ぼしています。

こうした被災地域の美術館の置かれた窮状を少しでも救い、停滞する美術館活動の回復に寄与するため、全美では様々な活動を行い、会員館をはじめとする美術館を支援しています。別稿で報告するように、文化庁が主導する「文化財レスキュー事業」においても、全美はその一翼を担い、全国会員館の学芸員を中心とする多くの職員が、美術作品をはじめとする被災文化財の救出・修復を精力的に行っています。

また、10月5～9日には、全美が全国美術商連合会及び文化庁との共催で、我が国を代表する芸術家400人に作品を無償で制作、出品していただき、それらを展覧しオークションにかけ、売り上げを被災した美術品の保存・修復及び美術館活動支援に充てるための「東日本大震災復興チャリティー・オークション　今日の美術展」を開催し、多くの方々からご支援をいただきました。およそ1億3000万円の収益金は、今後、全美東日本大震災復興対策委員会において企画立案される、被災美術館の復興及び活動支援事業に充てられます。

さらに、全国の美術館関係者にとっての朗報として、「美術品国家補償制度」の成立があります。これは、国民が美術品を鑑賞する機会の拡充に資する展覧会の開催を支援するため、その主催者が展覧会のために借り受けた美術品に損害が生じた場合に、政府が当該損害を補償する制度です。昨年3月に法律が成立し、6月から施行されています。本制度が適用された最初の展覧会は、「プラド美術館所蔵　ゴヤ　光と影」展（国立西洋美術館）及び「生誕100年　ジャクソン・ポロック展」（愛知県美術館、東京国立近代美術館）ですが、法案審議で修正がなされたように、今後は、学術的・文化的に価値が高い展覧会が、大都市に限らず全国的な広がりの下で開催できるよう配慮がなされることが求められます。

この度の「ZENBI」の創刊に当たりご尽力をいただきましたニュース研究部会の部会長をはじめ部会の方々への感謝と全美の発展のために今後とも会員館のご協力をお願いいたします。

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
(1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
(2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
(3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
(4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否
(1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議ニュース研究部会（以下「部会」という。）に一任とする。
(2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について
(1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
(2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
(3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
(4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いがが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について
(1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
(2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他
(1) 原稿料は支払わない。
(2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

編集後記

最初の会議からほぼ3年越し、ようやく発行の運びとなった『ZENBI』の創刊号をお届けする。デジタルが主流のこの時代にあえて紙媒体の本誌を発行する意味はふたつある。まず本年創立60周年を迎える全国美術館会議の活動と全国の美術館が置かれた状況をその時々において記録し、冊子として蓄積していくこと。もうひとつは美術館活動に関する開かれた批評の場を作り出すことである。歴史は上書きできず、批評は責任を伴う。日々の更新と匿名性を本質とするインターネット上の言説に対して、あえて不自由さを逆手にとることにした。

東日本大震災は美術館とは何かという問題をあらためて私たちに突きつけた。今回寄せられた原稿の多くにこの問いを真摯に検証する姿勢が認められた。そして私たちが美術館職員として被災地の美術館、博物館に対して果たすことができたせめてもの活動としていくつかのレスキュー事業について報告を掲載した。お忙しい中、原稿をお寄せいただいた方々へ深く感謝する。

『ZENBI』は今後、年に二回発行の予定である。美術ジャーナリズムが必ずしも十分に機能していない現在、美術館という立場から美術をめぐる状況を今後も定点観測していきたい。今日、多くの美術館で展覧会や普及活動が続けられているが、それらを相互に批評する場は少ない。美術館活動を活性化するためにも実践と批評のダイナミズムは必要不可欠である。美術館に関わる者でなければ獲得しえない視点もあるだろう。ZENBIフォーラムは加盟館の職員に対して常に開かれている。多くの方からの投稿をお待ちしている。

(O)